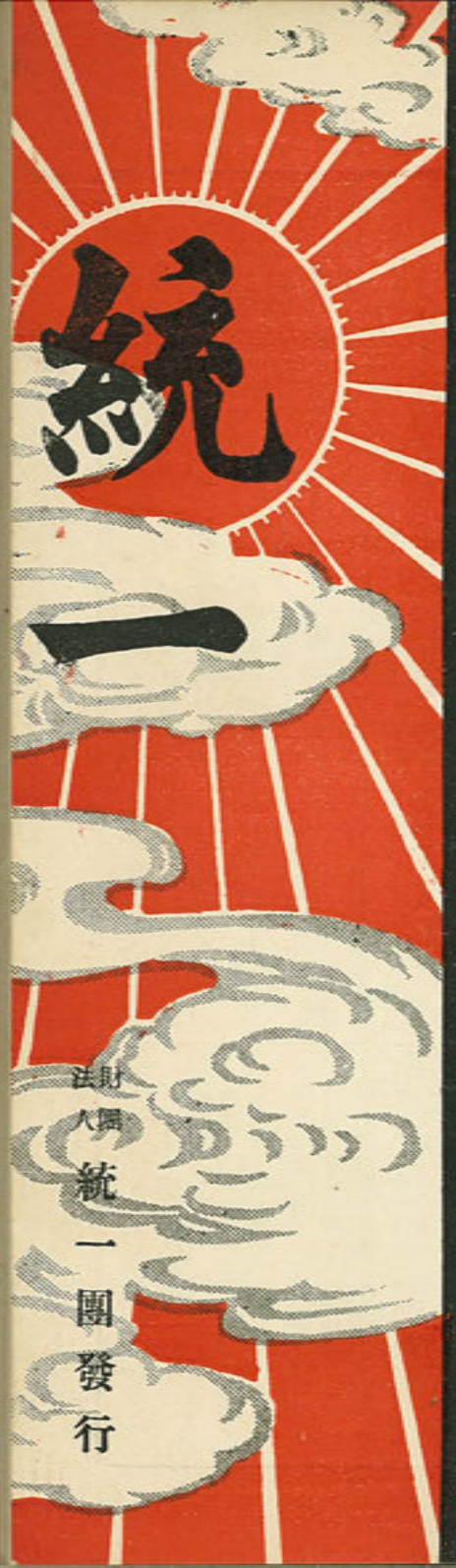


目次

本佛の感應（中篇續）……日生上人
日蓮教學講座（第六回）……河合陟明
日什正師諷誦章講話（其七）……梶木顯正
法華經講話（第三講）……小林一郎
記事
○各地教信　○寄附團費誌料領收

第三十九年三月號

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢献セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サゞル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　第二我國精神文化ノ精髓ヲ闡系的ニ發揮スル事　第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ願望スル所ナリ

本團略則

◎目的　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎維持員　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ維持員トス

◎贊助員　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラルヽ方ヲ贊助員トス

◎正團員　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラルヽ方ヲ正團員トス

◎入團　御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

本佛の感應（中篇續）

日生上人

四人のお弟子といふのは『須菩提尊者』、『迦旃延尊者』、『迦葉尊者』、『目連尊者』の四人であります。この四人の方が佛さまが、法華經をお說きになつた有難いことゝ、舍利弗尊者に佛になる許しをお與へになつたことを聞いて非常に有難く考へて、もう嬉しくて嬉しくてたまらない、それで法坐を立つて一心にお釋迦さまの顏をみつめて眞心を籠めて自分の只今了解をしたといふことを申述べるのである。私共は今まで長い間佛道修行をしましたけれども、小乘の教やなにかをやつて居りまして、結構な佛さまになれるといふことを自分は考へないで居りました。佛さまは最早長い間、法華經に來るまで四十餘年の久しきに亘つていろ〳〵と法を御說き下された、然るに自分はその間の說法に於ても未だ眞實を覺らずして今日に來たのであります。それといふものは、小乘阿含の覺で事足れりと思つて、別段これ以上に進んで佛法はないものだと考へて居りました。他の菩薩たちが佛さまになつてゆくことに付ても、羨ましいとも思はずして居りましたが、今にして考へるといふと、誠にこれは心得違ひのことでありました。いま法華經に來つて此上もない結構な數を聽いて、さうして自分等も佛さまに成れるといふこと

に付ては、こんな嬉しいことはありませぬ。恰度譬へてみれば結構な寶が澤山あつて、それが自分のものになると思はぬうちに親の方からして、これはみなお前にやると云つて家督相續を許されたやうなわけで、如何にも有難いことであります。

就てはこの意味合を一つ譬へに寄せて申上げてみたいと思ひます。こゝに一人の人があつて、それが子供の時分にお父さんの家から飛出して遠く遠方に流浪をして、五十年の長き間彷徨うて乞食になつて居つた。それが廻り廻つてまたしまひに舊との故郷に歸つて來た。お父さんの方では子供が家を出てから非常に心配をして、一日も忘れることなく、先づ流浪をした者が通りさうな道へ出て——例へば牛込の柳町邊に父が住んで居つたとしたならば、四谷見附とか赤坂見附といふやうな、成べく人の大勢通りさうな角の處に家を買求めて、さうして外を通る人間の見えるやうにして、自分の子供が若しや彷徨うてその邊を通りはしないかと思つて注意をして居つた。家の者にも言つけ、自分も絶えず外を見て、今日や歸つて來るか、明日や戻つて來るかと思つて、雨が降つても風が吹いても子供の家に歸ることをのみ願つて居つた。その長者の家は非常に富み榮えて居つて、諸々の寶が藏の中にいつぱいに充ちて居る、召使の人間も澤山ある、もうなに不自由のない立派な家である。たゞその國中で一ばんえらいのみならず、外國にまで金を貸すといふやうな大金持であつた。ところがその子供が流浪をして、だん〳〵に廻り廻つてそのお父さんの居られる家の所にやつて來た。お父さんの方はいつもその子供のことを忘れずに居つたからして、ひと目見て妻は非常に變つて居るけれどもその乞食が自分の子に違ひないといふことを知ることが出來た。さうして平生思ふには、自分はこんなに澤山の寶があつても、子供が家へ歸つて呉れなければなんにもならない、是非この寶を子供に與へたい、さうすれば最早自分は心殘りがないと思つて居るときに、その子供が家の門口に立つて『なにかあまりものでも下さい』と云ふて來た。お父さんは奥の方からそれを見て非常に喜んで、自分の傍に居つたところの召使と云つても立派な風をして居る、その者に言つけて、『早くあの乞食を伴れて來い』と、言つた。ところがその家は大變立派な家であるし、召使も綺麗な風をして居る、立派な人間がその乞食をして來た子供の傍に來て『ちよつと家へ這入れと』いふやうなことを言つたものであるから、物の言かたも横柄なものであるから、子供はびつくりして『私は泥棒ではありませぬ』と云つて逃出した。けれども長者の言つけであるから、どうしてもそれを捕まへて歸らなければならぬといふので、後からどん〳〵追かけて來た、あまりひどく追かけたものであるから、その子供は驚いてとう〳〵氣絶をしてしまつた。これは多分自分を捕まへて行つてひどい目にあはすのだらう、とても捕つたら命はないと考へて、遂に氣絶をしてしまつたのである。その樣子をお父さんが見て居つて、使の者に言つけて、さうひどいことをしてはいかぬ、そんな無茶なことをして氣絶をさしてはいかぬ、早く呼吸を吹返すやうに手當をしてやれといふので、それから顔に水を掛けたりして漸く蘇生をして、その日はその儘別れたのであります。ところが父は寢ても睡

られない、どうかあの子供を家に伴れて來て家督相續をさせたいけれども、如何にも長年乞食をして卑しい料簡がついて居るものであるから、いきなり家へ來て家督相續をしろと云つても彼は信じないであらう。これは一つ手段方法を設けてやらなければならぬといふので、父自ら非常な穢い着物を着、乞食のやうな立ん坊のやうな風をして、自分が長者の家に居つたのではどうしてもこの子供に接近することが出來ないから、家の者に能く旨を含めて、自分から哀れな立ン坊の生活に這入つて、軒の下に寢たり橋の下に寢たりして、長者のお父さん自身が顏を汚し手を汚し、さうしていまの乞食が怪しまないやうなりに身を落して、まずい物を食ひ穢い着物を着、寒い風に吹かれて一緒に乞食の生活をして、さうしてだん〳〵とその子供に近附いて行つた。さうしてその長者が言ふには『お前は毎日さうして乞食をして居るが、貰ひのある日はいゝけれどもない日には隨分困るだらう、自分はどこ〳〵の家に出入をして居るが、その家に行つてごみ溜の掃除をしたならば、三度の食事は必ず欠かさず頂くことが出來る、乞食をして貰ひのあつたときはいゝけれども、貰ひのない日は隨分困るから、どうだお前もあの家に行つてごみ溜の掃除をしやうぢやないか、俺の仕事の半分はお前にやらせるから、二人で力を協せてやらう、若しお前が仕事がわからぬといふなら俺がしてやる、兎に角踵いて來い、食べるものはお前に不自由をさせぬやうにしてやるから、と優しく言ふものであるから、乞食は非常に喜んで、遂にその長者と一緒に長者の家に出入りをするやうになつて、ほんとうはその家の主人であるけれども、自ら穢い風をして長者はその子供と一緒にごみ溜掃除をして居つた。或日のこと、父はいまゝで着て居つた穢い着物を脱いで少し綺麗になつて、家に上つて窓のところから顏を出して見ると、自分の子供は毎日やつて來てはごみ溜の掃除をしてまた橋の下に行つて寢て居る。可哀相に顏は痩せ衰へてしまひ、色は黑いやうな變な色になり、着物はどろ〳〵になつて汗で非常な臭氣を放つやうになつて居る。實に哀れなものである、どうぞ彼を自分の家に入れてもつと好い生活をするやうにしてやりたいものだと、一生懸命にお父さんが考へて、それから少しづゝ用事を取替えて、初はごみ溜の掃除をして居つたのを庭の掃除をさせるやうにし、それから『今日は足を洗つて上に上つて縁側を拭いて呉れ』といふやうなところから、いろ〳〵父が苦勞をしてだん〳〵家の中に引上げるやうにして、遂にそれがいよ〳〵番頭に取立てられることになつて、さうして藏の中の大事な品物でも、他の者には見せないやうな所でも、この番頭には一切その實の所在を敎へ、また書付でも株券でも大事な書類みな悉くこの子供に知らせ、且つ預けて置くやうにした。子供は自分を信用されることの厚きに感激をして、一生懸命働いたものであるから、立派にその番頭の役目が勤まるやうになつた。そこで或日のことその長者は自分の親類——親類と云つても國王もあれば大臣もあれば、立派な身分の人がある、金持も澤山ある、さういふ親類をみな集めた。恰度大倉喜八郎君がこの頃八十八の祝を帝國劇場でやつたやうに、あれはたゞ自分が成功をしたといふお祝ぐらゐのことであるけれども、あゝいふ風な大宴會を開いて、そこでこの長者が言ふには『親類の

人達みな聞いて下さい、また立會の皆さんも聞いて下さい、私が前に大事な子供を失うたといふことは、皆さんの中に記憶してお在でになる人もあらうと思ひます。實は玆に番頭に取立てゝ居る何某といふ者は、その私が生んだ子であつて、私が何處の家に居る時分に迷うて出て、彼は遂に五十餘年の長きに亘つて淺間しき流浪の生活をしたのである。その舊の名前は何々といふ名前であり、實は私の子である。私は一日も子供のことを忘れずに居つたから、ひと目見たとき我が子といふことがわかつたけれども、容易に乞食根性が脱けないものであるからいろ〳〵の苦勞をして長年取立てゝ、漸く斯樣に番頭の仕事をさすやうになりました。私は全くこの番頭の親である、この番頭は全く私の子に違ひない、それ故に今日は諸君の立會を煩して家督相續の式を擧げたいと思ふ。皆さんにも御異存はなからうと思ふが、私の持つて居る藏に溢れて居る凡ての寶、其他の書付の如きも、私の權利に屬する總てのものは悉くこの番頭が承知をして居ります、それ等の總てのものはみなこの子供に與へるのであります。それ故に私が持つて居るところの一切の財寶悉く今日限りこの子供に與へ遣はすものであります』といふことを申しました。親類の人達も誰も反對はない、それは目出度いことだ萬歳々々であります』といふことを申しました。番頭であつた子供は驚いて『ア、えらいことになつて來たな、併しといふわけで、みなこれを祝福する。番頭であつた子供は驚いて『ア、えらいことになつて來たな、併し實際自分が長者の子であつたとするならばこれを頂かなければならぬ』といふので、一時の驚きは變つて非常な喜びとなり、その家は沸返るやうな喜びで、多くの奉公人に至るまで『家の息子さんが歸つて家督相續をなさつた、目出度いことだ、えらいことだ』と云つて、近隣相傳へてこんな目出度いことはないと申した。恰度それと同じことであります。

この譬のうちに父の長者といふのは、お釈迦さま、あなたのことに譬へたのであります、長らく流浪をして居つて乞食になつた子供といふのは私共のことであります、それが今度法華經に於て家督相續を許されるが如くに、私共まで如何なる者でも、惡人でも女人でも、二乘闡提と言はれし者でも、殘らずみな法華經に於ては成佛を許されたといふのは、長き流浪して居た乞食のやうな子供が取立てられて家督相續をしたが如くに、佛さまのお持ちになつて居る『一切の功德善根』、お釈迦さまが限りなく長い時間にお積みになつたところの凡ての功德善根、藏に溢れて居るところの貴いものは、悉く吾々にお與へ下されるのである。それ故に自分には德の足らぬことがあり、力の足らぬ所があつても、佛さまの方から功德を讓り與へて下される。恰も乞食でありし子供が一擧にして長者となりしが如くに、罪深かりし凡夫の吾等が一ぺんに尊い佛さまの後を嗣ぐことが出來るのである。佛の子として得べきところのもの、菩薩として積むべきところのもの、佛となつて持つべきところのものなに不足もなく一切のものが一擧にして佛さまの惠みよりして與へられる、それを素直に頂戴をすれば、今までは破れた着物を以て流浪して居つた乞食が、なんの不自由もない立派な長者となりしが如くに、申分のない佛さまになることが出來た次第でありますといふことを申上げました。

これが『信解品』の大體の譬であります。この中の最も大事なところは、小供は迷うて出て長者のことを忘れて居るけれども、長者の方は一日も忘れてゐないといふ點である。どこへ行つたかわからぬけれどもそのうち歸つて來るであらう、どうしたらうかと云つて非常に心配をして、なるべく子供に遊び近ひ易い所に家を構へたといふ、これが實に大きな點である。これは吾々の前の生からの關係になつて居るのであつて、釋迦如來が悉達太子としてこの人間の世の中にお出まし下さつたことが、即ち赤坂見附の所に家を求めて、大勢のものに出會へるやうにして下さつたといふが如きものであつて、釋迦如來のやうにこの人間の世の中に出て來て教を說いて下さらなかつたならば、阿彌陀如來や藥師如來のやうに、人間の世の中に顏を出さぬ方であつたならば何事も知ることは出來ないのであるが、それが知れるといふことは釋迦が說き居るからであつて、釋迦がなかつたならば阿彌陀さまもなければなにもない。全くみな釋迦如來が悉達太子として、迦毘羅衛城の嵐毗尼園、花咲き鳥囀る裡に人生に降誕をなさつてさうして前後八十年の長きに亘つて一切經を說き誡に結構な教を遺し下さつたことに依つて、吾等は眼醒めて乞食の根性から戻つてこの結構な佛さまを慕ふことになつたのである。してみるといふとこの譬の全體といふものは、釋迦如來と吾等の關係である、長者と長者の子の迷うて來た、さうしてその寶を讓り與へられる、それを受取るといふこの關係が全體である。これを信じて『南無妙法蓮華經』と唱へて居るのであつたならば、即ち佛さまの有難いことがだん〳〵と心のうちに明かになつて來るわけである。これをたゞお經を棒讀みにして居るからわからぬけれども、この意味をよく味うて讀んでみたならば、實に精神に感激を起して、佛さまの有難いことを如何にして言表さうかと努力したのが『信解品』である。どういふ風に言表したならば佛の有難さが說けるだらうかといふところから、斯樣な譬といふものは出たものであると私は思ふ。この佛を忘れてしまつて、鬼子母神さまぢや、帝釋さまぢや、或はわけのわからぬ文字ぢやといふやうなことでは、この信解品の精神といふものは根本からぶち壞されてしまふ、なにもわからぬであらうと思ふ。

それからこれに對して、その信解の仕方が宜しい、間違なく、ヨウさういふ風に心得たと云つて、佛さまの方からお褒めになつて、さうしてそれを證據立てられて間違ないといふ許しを與へた、それが次に『藥草喩品』として現れて來るのである。（大綱）

日蓮教學講座（第六回）

文學士　河合陟明

★★★★★

世尊よ、我れ今道を得　果を得　無漏の法に於て清淨の眼を得たり、我等長夜に佛の淨戒を持つて、始めて今日に於て其の果報を得たり、法王の法の中に久しく梵行を修して、今無漏無上の大果を得たり……世尊は大恩ましまします。希有の事を以て我等を憐愍し教化し利益したまふ、無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん

（妙法蓮華經信解品）

★★★★★

第一章佛陀の人格的諸相

第一節　佛陀の恩德

大覺世尊の大恩はたとひ劫を盡すとも說き終らないであらう、よしや虛空を極むるとも述べきらないであらう、その恩德も種々ある中、今はわずかに出現の恩德を讃歎し奉つてゐるのである。之は化他の德である、更に自行の功德、內證甚深の德性は如何ばかり大きなものであらうか。然し佛陀は衆生濟度の化他の御辛勞が即ちそのまゝ御自行である、佛の御働きとは衆生濟度の一事に盡きる、而してその濟度の一行は又一切行と表れ、或は身の所作、口の說法、形にも聲にも、その中に佛の甚深の功德を包んで之を我等に恩まれるのである。我等貧窮孤露の衆生はこの大功德を受得するを得て、こゝに如來の力は救濟力と成つて衆生に實るのである。これ如來神通之力である、佛力不可思議である、而も是の如き世尊の恩德は悉く惱苦の衆生を如何にして濟度せんかと愍念息まざる慈悲の一念より出づるのである

『衆生界盡きなば我が願盡きん、然れども衆生界無邊にして盡くべからず、此の故に亦我が願も盡くるの期無けん』佛身は慈悲體なり、說法は慈悲語なり濟度は慈悲の收穫なり、慈悲は源である、而て信仰は慈悲の對應物である、而て信仰は濟度の第一步である、其は擔保である、豫約である、その完成は佛果の開覺にある、佛陀の大慈悲は我等の冥具する本覺の妙體を養つて竟には世尊と等しき無上の證得無上の力用を得せしめ給ふのである。此の一切が佛陀の恩德であり、而も之が出現の因緣に端を發したのである。此の恩德は如何なる方面からも說き得るが日蓮聖人が就中主師親といふ全く人格的意識に於て之を見られたのは、特に卓越せる所である。佛は大人格者なれば是は言ふまでもないが、その人格の德性を正しく人格的に說き敎へられて、聖人自身の又從つて我等の宗敎意識、信仰意識を圓滿に整束せられたのである。

華嚴疏には如來の三德を擧げ、その中に特に恩德を數へてゐる。

『恩德とは、如來は大願力に乘じて衆生を救護すること猶赤子の如し、是を恩德と爲す』

と說き、又智德及び斷德（解脫）を明かにしてゐる今此の文も溫き母子の關係に於て如來を信賴してゐるのは、如何にも心地好き至りである。

子を思ふ親の敎のなかりせば
かりの宿りに迷ひはてまし

みなし子となに思ひけん世の中に
　かゝる御法のありけるものを
うき世とて身はみなし子となりはてぬ
　我れ迷はずな法のたらちね

其他天台の『法華文句』にも、嘉祥の『法華玄論』にも各々世尊の十大恩を列ね、又悲華經の釋尊五百の大願も之を結束するに恩德の一に歸する。

而て如來の恩德は大慈悲の發作を認め、八萬四千の教門亦皆この恩德に歸するのである。佛教の妙は一切の理法も之を證得せる智慧も悉く之を佛陀の慈悲より發作するを認め、而てこの慈悲の發作は單に理法と智慧との上に發信せしむるに止めず、能く之を佛陀の功德の上に移し、而てこの功德化せる理法智慧慈悲を取つて之を我等の心田に種ゑ貫らしめ給ふこと、裸者の衣を得たるが如く、貧しきに寶を得たるが如く、病めるに藥を得たるが如く、赤子の母を得たるが如くである。佛陀の無量無邊阿僧祇（不可思議）の大功德を讓與せられ受得するが故に『深く自ら慶幸す　大菩利を得たりと』とは謳歌し『佛の名十方に聞えて　廣く衆生を饒益したまふ』とは讃歎し奉るのである。實に日蓮聖人は三世十方佛敎一切の諸佛諸菩薩の恩德を悉く釋尊に集中し、之を中心とし之を源泉とし之を統一歸着とし、いはゆる一切の恩德功德を釋尊本佛の大慈悲に推功歸本して、こゝに心靈界の大憲法、佛敎の統一、信仰上の大義名分、釋尊の絕對の大恩を唱道せられたのである。之によつて嚴然と佛敎の正邪を裁斷せられたのである。凡そあらゆる宗敎に於て、敎祖の人格的出現は其の一切である、佛敎に於て佛陀釋尊の出現は佛敎の一切であらねばならぬ。

日蓮聖人『師恩報酬鈔』に云く、

此の釋迦如來は三つの故まし〳〵て他佛にかはらせ給ひて娑婆世界の一切衆生有緣の佛となり給ふ一には此の娑婆世界の一切衆生の世尊にておはします、阿彌陀佛は此國の大王にはあらず、釋迦佛は譬へば我國の主上の如し、先づ此の國の大王を敬うて後に他國の王をば敬ふべし、天照大神正八幡宮等は我が國の本主也、迹化の後神と顯れさせ給ふ、此の神にそむく人此國の主となるべからず されば天照太神をば鏡にうつし奉りて內侍所と號す、八幡大菩薩に敕使有つて物申し合せ給ひき大覺世尊は我等が尊主也、先づ御本尊と定むべし二には釋迦如來は娑婆世界の一切衆生の父母也、先づ我が父母を孝し、後に他人の父母には及ぼすべし、例せば周の武王は父母の形を木像に造つて車に載せて戰の大將と定めて天感を蒙り殷の紂王をうつ、舜王は父の盲たるをなげき涙をながし手をもてのごひしかば、本の如く眼あきにけり、此佛も又是の如く我等衆生の眼をば開佛知見とは開き給ひしが、いまだ他佛は開き給はず、三には此佛は娑婆世界の一切衆生の本師也、此の佛は賢劫第九人壽百歲の時、中天竺淨飯大王の御子、十九にして出家し三十にして成道し五十餘年が間一代聖敎を說き、八十にして御入滅、舍利を留めて一切衆生を正像末に救ひ給ふ、阿彌陀如來藥師佛大日等は他土の佛にして此の世界の世尊にてはましまさず

而て他土他佛の思想も一往方便の說であつて、やがて釋尊本佛の三世十方を盡し給へる絕對的大化の一段に至つて破折し、開會し、統一せられるのであるが、かくの如く其他枚擧に遑あらざる日蓮大士血涙の慈訓皆往くとして此旨を談ぜられざるは無い。苟くも此土の敎主釋尊の御弟子として出家得度したるもの却つて他土の佛に歸命するが如き、是れ實に釋迦敎徒として大義名分を亂り本末を誤る亂臣賊子の所行たり諸他の謬亂是より起り來るであらう、噫禍なる哉、佛弟子として此土の佛陀を捨つ、假令如何に己義莊嚴するも佛敎徒としての歸趣を失へるは

既に明かである、如何んぞ『弟子一佛の子と生れて諸經の王に事ふ何ぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さゝらんや』といふ日蓮聖人悲憤の叫び起り來らずして止み得るであらうか、今之を本經法華の依經に鑑み更に大藏全典に照應するに、本經始め此等一切の諸經何れも伽耶成道の因緣を尊重せる事前來既に說述せるが如くである。況んや猶本經壽量品に釋尊の本佛なる事を顯本する時にも、『皆今の釋迦牟尼佛釋氏の宮を出でゝ伽耶城を去ること遠からず道場に坐して云々』と說けるもの即ち知る久遠の本佛の開顯と云ふも今番出世の釋迦佛を中心としたるものなる事明かなるに於てをや。竊に思ふ佛敎統一の最後の聖業は、慈悲益物の（物とは衆生の義、益物とは衆生利益の事なり）今番出世の大恩敎主釋迦牟尼世尊に拜跪せしむるの一點に存する事を。

以上降誕の因緣に關して屢々述べ來つたのであるが、次に釋尊と我等との深厚の因緣を尋ね明らむべき恩化の第二の義門は誓願の因緣である。かの淨土門の徒が彌陀の誓願を偏崇するに對して、悲華經の寶海梵志が五百の大願を起し、熱烈なる大慈、橫溢せる血涙、剛健なる意氣、紙面直ちに燃えんとするが如き誓願を頼んで以て、今の敎主に信順すべしと談ずるのである。

悲華經大施品に云く、

爾の時に會中に菩薩摩訶薩あり名を寂意と曰ふ、如來の種々の神化を瞻をはりて佛に白して言さく世尊よ、いかなる因緣の故に其の餘の諸佛の有らゆる世界は淸淨微妙にして種々莊嚴し、五濁を離れて諸の穢惡無く、其の中には純ら諸の大菩薩のみありて、種々無量の功德を成就し諸の快樂を受くるや……今我が世尊はいかなる因いかなる緣にて斯の穢惡不淨の世界に處し、命濁劫濁衆生濁見濁煩惱濁是の五濁惡世の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、四衆の中に在りて三乘の

法を說きたまふや、いかなる緣を以ての故に是の如き淸淨世界を取らずして、五濁惡世を遠離したまはざるや佛寂意菩薩に告げたまはく、善男子よ菩薩摩訶薩は本願を以ての故に淨妙國を取り又願を以ての故に不淨土を取る、何を以ての故に善男子よ菩薩摩訶薩は大悲を成就するが故に斯の穢惡不淨の土を取る耳、是の故に吾は本願を以て此の不淨穢惡の世界に處して阿耨多羅三藐三菩提を成ぜり、善男子よ汝今諦かに聽きて善く之を思念し善く受け善く持てよ、吾今當に說くべし、時に諸の菩薩み敎を受けて聽きたてまつる、佛寂意菩薩に告げたまはく、善男子よ我れ往昔に於て恒河沙等の阿僧祇劫を過ぎて此の佛の世界を劃提嵐と名づく、是の時の大劫を名づけて善持と曰ふ、彼の劫の中に於て轉輪聖王あり、無諍念と名づく、四天下に主たり、一大臣あり名づけて寶海日蓮聖人松野殿御消息に云く、

昔乃往過去の古、劃提嵐國と申す國あり、彼の國に大王あり無諍念王と申す、彼の王に千の王子あり、又彼の王の第一の大臣を寶海梵志と申す、彼の無諍念王の千の太子は穢土を捨てゝ淨土を取り給ふ、其の故は此娑婆世界は何なる所ぞと申せば十方の國土に父母を殺し正法を誹謗し聖人を殺せる者、彼の國々より此娑婆世界へ追ひ入れられて候、例せば此の日本國の人大科ある者獄に入れらるゝが如し、我が力に叶はざれば哀愍せずして捨て給ふ、寶海梵志一人請け取つて娑婆世界の人の師と成り給ふ、寶海梵志の願に云く、『我れ未來世穢惡土の中に於て當に作佛することを得べし、即ち十方淨土より擯出せられたる衆生を集めて我れ當に之を度すべし』と誓ひ給ひき。無諍念王と申すは阿彌陀佛也、其の千の太子は今の觀音勢至普賢文殊等也、其の寶海梵志と申すは今の釋迦如

來也、此娑婆世界の一切衆生は十方の諸佛に拔き捨てられしを、釋迦一人計りして扶けさせ給ふを唯我一人と申す也

師恩報酬鈔に云く、

此の娑婆世界は十方世界の中の最下の處、譬へば此國土の中の獄門の如し、十方世界の中の十惡五逆誹謗正法の重罪逆罪の者を諸佛如來擯出し給ひしを、釋迦如來此土にあつめ給ひ、三惡並びに無間大城に墮ちて其苦をつぐのひて人中天上には生れたれども、其罪の餘殘ありてやゝもすれば正法を謗じ智者を罵る罪つくりやすし、例せば身子（舍利弗）は阿羅漢なれども瞋恚のけしきあり、畢陵は見思（知識の迷と情欲の煩惱）を斷せしかども慢心の形見ゆ、難陀は婬欲を斷じても女人に交る心あり、煩惱を斷じたれども餘殘あり、何に況んや凡夫に於てをや、されば釋迦如來の御名を聞くや凡夫に於てをや、されば釋迦如來の御名をば能忍と名けて此土に入給ふ一切衆生の誹謗をとがめずよく忍び給ふ故なり、此等の秘術は他佛の缺け給へるところ也、これを見て阿彌陀佛等の諸佛世尊も悲願を發させ給ひて心には恥をおぼしめして還て此界にかよひ四十八願十二大願なんどは起させ給ふなるべし、觀世音等の他土の菩薩も亦復是の如し……

我等が父母世尊は主師親三德を備へて一切の佛に擯出せられたる我等を唯我一人能爲救護とはげませ給ふ釋尊、其恩大海よりも深し、其恩大地よりも厚し、其恩虛空よりも廣し、二つの眼をぬいて佛前に空に星の數備ふとも、身の皮を剝で百千萬天上に張るとも、淚を鬪伽の水として千萬億劫佛前に備ふとも、身の肉血を無量劫佛前に山の如く積み大海の如く湛ふとも、此佛の一分の御恩を報じ盡しがたし、而るを當世の僻見の學者等、設ひ八萬法藏を極め十二部經を諳んじ大小の戒品を堅く持ち給ふ智者なりとも、此道理に背かば惡道を免るべからずと思食すべし

而て之を法華の本經に對照するに、壽量品の如來秘密神通之力の文に依れば、本佛は久遠以來斯くの如き衆生濟度の菩薩の願業を成ぜんが爲に或は分身して寶海梵志とも成りしを知る可く、其根源は本佛の毎自作是念の常恒不斷の智願悲願海より現れ、其形相に關しては『或は己身を說き、或は他身を說き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し或は他事を示す』の六句、及び『我れ燃燈佛等と說き』と云へる、此の等の字の中には、自ら寶海梵志をも含んで居るのである。實に梵志が十方擯出の罪障深重の衆生を對機として委く之を濟度せんと誓へる所、慈悲の無限大に無窮遠に發作せるを見るべきであらう。今時念佛門の徒、彌陀が十方擯出の衆生を攝取すなどゝ云ふは、淨土の依經彌陀の誓願には跡方も無き事である。叙し來つて此に至らば、所謂諸佛因位の菩薩の誓願に於ても我が釋迦牟尼佛こそは獨り超世の大悲願を具へて此の娑婆世界の我等衆生と深厚深重の大因緣を有し給ふ事を感佩せざるを得ぬ。

されば妙法華經にも、之と符節を合すが如くに渙發し照應して、佛世尊は特に五濁の惡世に出現せられると說く、

五濁とは、一に劫濁、所謂時代爛熟して飢饉、疾疫刀兵、暴動等の恐慌を免れぬ時である。二に煩惱濁所謂貪、瞋、痴、慢、疑、增長して、愛欲、憎惡、鬪爭、諂曲、虛僞多く、邪法に心惱む時である。三に衆生濁所謂人倫亂れて、父母師長に孝敬ならず齋法を修せず、因果を畏れず、功德を作らず、社會の秩序破るゝ時である。四に見濁、所謂邪見偏見魔想毒想多くして、食毒の徒輩出し、思想不安に陷り社會動亂する時である。五に命濁、所謂壽命短く、欲望多く、願望叶はず、知らず識らず又は自ら知りつゝも罪惡の業を造り重ぬる時である。是の如き等

の弊惡濁亂するが故に、衆生は垢重く、德薄く、不善累積し、國土破る。佛は世に出現して先づ此の弊惡を救はんが爲め、方便力を以て種々の道を說かれる。これ蓋し其の究極の目的はたゞ一佛道の爲である。

諸佛の中には極樂世界に居坐つて薄志弱行の徒輩を歡迎するお方もあるかも知れぬが、我が釋迦佛は偉い、擇んで惡世に出現せられてこそ佛の御用が出來る、骨の折れる仕事が痛快だ、釋迦佛の敎化圈內に生れ會へる我等何ぞ欣喜せざらんや、宜しく勇を鼓して佛事を助け奉るべきである。

而もかくの如き末法の濁世への出現はたゞ佛陀に限つたことではない、大乘の菩薩の如き偉大なる人格と敎法とは、いつも社會の民衆が思想的にも生活的にも亂れ荒み苦しんで居る時に現れて、之が救濟の光明と活力とを與へるのである。人類生活の危機に臨み國家社會の非常時に際して、眞の人格と眞の敎との効果は顯れるのである。今日の世界今日の國家今日の思想界は果して何人を要求し何物を要求するか、そは頗る明瞭なる所であらう。

かの寶海梵志の燃ゆるが如き大誓願大行願を今日そも何人が果すのであるか、何人の使命であるか、『我も一分の寶海梵志たり』と『今日』に躍出し、『明日』の時代を約束する敎界の英傑は今何處に蟠居せりや。

佛陀が出誕の時一指天を指し一指地を指し、四方に七步して『天上天下唯我獨尊、三界皆苦我當度之』と言はれたのは、寶海梵志時代の誓願より見ても成程と頷かれる、そして之を現代的に解釋すれば一は現實を指し一は理想を指し、即ち脚下の現實にしかと大地を踏みしめつゝしかも、如來第一義天の境界と絕えず接觸を保つて行くべきことを意味する、いはゆる『現世を忘れず久遠の理想』である。佛陀にとつては覺者の宣言であるが、我等にとつては菩薩の

願業である。『上に菩提を求め下に衆生を化す』である、之が大乘菩薩の本領である、此の方向に徹しきらう燃えきらうとする處に宗敎的精神生活がある實證體驗の生活がある。『我れ無上菩提を成ぜずんば死すとも此座を去らじ』と誓を固めし菩薩悉多太子が成道の直前、魔軍の大攻擊に當りてや威容魔王を一喝し『天上地下この金剛寶座に値ひする者は唯我れ一人のみ、地神よ、速かに出でゝ之を證明せよ』と叫んで地神轟然として躍り出で魔膽を破りしと云ふは、同じく菩薩日蓮聖人が一代奮鬪の最高潮たる龍ノ口法難に際して、『不覺の殿原かな、如何に約束をば違へらるゝぞ、臭き頭を法華經に捧げて金色の如來と成るは、砂を以て黃金に易へ糞を米に貿へるが如し……これ程の喜びを笑へかしと』四條金吾を叱咤さるゝや威音天地を震動せしめて霹靂雷電頸斬る能はざりしと好一對の大事實ではないか。

寶海梵志の誓願は、かくて現前濁世の出誕と爲り降魔成道の活劇と爲り、而て『今此の三界は　皆是れ我が有なり　其の中の衆生は　悉く是れ吾が子なり　而も今此の處は　諸の患難多し　唯我一人のみ　能く救護を爲す』の大宣言と爲り、遂に『每に自ら是念を作す　何を以てか衆生をして無上道に入り　速かに佛身を成就することを得せしめんと……作す所の佛事　未だ曾て暫くも廢せざる』久遠の梵音と開顯せらるゝに至つたのである。

【續】

南無妙法蓮華經

日什正師諷誦章講話（其七）

梶木顯正

十三、曼荼羅及本尊ノ功德ヲ歎ズ

因茲ニ謹ンデ聞ニ其名ヲ人者、盡ニ三妄執ヲ於一時ニ、一拜ニ此像ヲ一
輩ラハ者證ニ三菩提ヲ於一念ニ、頓極頓證ノ之秘法即身成佛ノ之龜鏡也

この文は如上明す所の曼荼羅、及建立する所の本尊の功德の廣大なる事を稱歎された段である。『因茲謹』の茲ニ因テとは先きに明す所の法義を受けて言ふ言葉、謹ンデとは敬虔の氣分を指す。『聞其名人者』と云ふ其名とは曼荼羅の上に建立されたる御本尊を指して其名と云ふ、『盡三妄執於一時』といふ三妄執とは、又は三惑とも云ふ、三惑とは一ッには見思惑、惑とは煩惱のことで、之の惑は現實生活の上に己れを苦るしめ迷はす煩惱を云ふ。二ッは塵沙惑これは高き精神生活の上に障碍となる煩惱三は無明惑これは生死の問題を解決して成佛を遂げんとするに障碍となる煩惱である。之れ等の三煩惱も如來の功德たる南無妙法蓮華經を受持して、救ひの本源たる御本尊の御名を聽聞し奉るならば、皆一時に消え失せて了ふの意、『一拜ニ此像ニ輩者』と云ふ拜とは受持する人の姿を指す、此像とは先きに『奉ニ圖繪ニ』とある畫像の大本尊を指すので、正しく慈悲の御手を垂れ給ふ信仰の絶對本尊即ち久遠本佛釋迦如來が、本化の四大菩薩を引連れて迷ひの世界に望み給ふ御尊像を指して云ふ。輩とは受持する所の修行の人を云ふ、『證ニ三菩提於一念』三菩提とは略式で委しくは阿耨多羅三藐三菩提と云ふが譯して無上正眞道或は無上正等覺と云ふ、即ち絶對無上の覺りと云ふことで、それが一念として一刹那の心に證すとは感得することが出來るとなり。『頓極』とは直ちに至り『頓證』とて直ちに證る、と云ふ意で何れも如來の功德如來の尊貴を現す曼荼羅及御本尊を讃歎し奉つた言葉である。『秘法』とは尤も大事な如來の秘藏し給ふ敎法なりの意、敎法とは先きの要法を指す。『即身成佛之龜鏡』とは、本尊は因に對する果を指示して居るものであるから、『因位の吾等が果上の佛となる』といふことを顯した手本也との意を云ふ、龜鏡とは手本と云ふことである。即身成佛とは凡夫が佛となるとの意を云ふ。

十四、法華經ヲ讃歎ス

次ニ此經者、諸佛出也之本懷、衆生成佛之直道也

此段は前文の曼荼羅及本尊たる如來を讃歎し奉つたに對して、法華經が諸佛出世の本懷經たることを

讃歎し給ふのである。『次此經者諸佛出世之本懷』といふ此の經とは法華經一部八卷二十八品を云ふ。諸佛とは本佛迹佛と云ふ中の本佛を除く他の一切の迹佛を云ふ、委しくは『十方分身の諸佛』と云ふ。日蓮主義に於ては佛を見奉る上に格式が定められて居るので、何時何處でも諸佛とあつた場合には必ず迹佛を指したのだと心得れば間違ひは無いのである。出世之本懷といふ諸佛の世に出で給ふ本懷とは主目的中心目標と云ふことで、此の法華經を說き護り持つ事を主目的とし給ふ意を云ふ。『衆生成佛之直道也』とは生きとし生ける一切の衆生が佛と成るに就ての尤も近くして正しい眞直の道だ、との御開山の御敎示である。何故にこの法華經が斯の如く諸佛の本懷經と云ふ樣な大切な經典かと云へば（古來から法華經は一切經中最第一の經典なりと決定されて居るのである）絕對果上の本主釋迦如來が、御自身の大慈大悲を明らさまに此經で全部御打ち明けに成つた經典であるからである。此の經以前の諸經では第一如來御自身の本佛に在ますことを秘し給ふたのみならず、吾等衆生の佛性を明し給はざるが故に惡人及女人の成佛は不可能であつたのである、然るに法華經に來つては從來秘し給ふた如來の本地久遠本佛を顯し給ふて、十界互具の人格平等を說示し給ふた。即ち一切衆生の成佛の可能原理をお明しになると共に、救ひの網を與へ給ふたお經であるからである。

十五、五種ノ修行ノ中ノ讀誦二行ヲ明ス

讀誦者、耳根相應之修行、此土有緣之善根也

御開山は佛敎の示す五種の修行即ち受持行、讀行、誦行、解說行、書寫行の五ツを完全に御修行になつて居られるお方であるが、今はトリワケテ其の中の讀行と誦行の二ツを明されるのである。『讀』とはお經の文字を見てヨム行、『誦』とは見ずに暗記でヨム行を云ふ。一體ヨムと云ふことにも佛敎では三種ある、即ち口にヨム、身にヨム、意にヨムを云ふ、がこの中でも意にヨミ身にヨムを以つて、色讀心讀とて最上最尊の修行としてある。『耳根相應之修行』とは聲と云ふものは目には見えないが、耳から這入つてその道理功德を心に會得せしめるものであるから、如來の救ひを人に與へる修行としては實に近道で、然も誰れにも容易に出來る非常に大事な行である、故に聞く耳を持つて居る者に取つてはこの二行は眞に相應い修行であるとの謂である。『此土有緣之善根』此土とは我等衆生の住んで居るこの世界を云ふ、今我等衆生の世界に於ては非常に適當なよい修行方法で、亦それが如來の大慈悲にツナガル橋となるのであるから、之れに過た善根功德は無いとの御明しである。

十六、同中ノ書寫行ヲ明ス

書寫者、法命久住之根源、憶持不妄之大善也

之の段は上の五種修行中の書寫行を明されるのである。『書寫』とは如來の教法を書き寫す事で、この修行は『法命久住之根源』即ち法命教法の壽命を久住として永く保たせる、何時々々までも永く後に傳へ遺して絶えしめない根本源の修行であつて、又『憶持不妄之大善』といふ忘れて思ひ出せないと云ふやうな時には何返でも見て忘れぬ樣にすればよいのであるから、實に愚痴暗鈍な吾等凡夫の爲には有難い大善事の行であるとの意である。（次續）

新加盟者

福島市森合字百舌鳥坊十　菅野廉太郎殿
（中村美津氏御紹介）
甲府市相生町四十二　穴山新之助殿
同　前　穴山豊殿
（高野孫左衛門氏御紹介）
滋賀縣蒲生郡櫻川村　外池ワエ殿
（外池字平氏御紹介）
東京市豊田谷區若林町　三浦かつ子殿
東京市牛込區余丁町　入江信子殿
岩手縣一ノ關町　小岩昌夫殿
西宮市森具北蓮毛　加藤準一殿
東京市澁谷區代々木山谷　伊藤
同　芝區三田綱町一　栃内京子殿
同　杉並區萩窪　大村恭殿
同　牛込區市谷山伏町　小池ふく子殿
（中村のぶ子氏御紹介）
同　麻布區富士見町　松田妙昭殿
（能勢賴武氏御紹介）

法華經講話（第三講）

文學士　小林一郎

目次

本門と迹門　本迹の字義　釋尊と本佛　應身佛　報身佛
法身佛　一切衆生悉有佛性　人は萬物と共に生く　宇宙の偉大なる力
すなはち本佛　本佛の慈悲のはたらき　一月萬影　顯はれてはじめて尊し
釋尊を模範とせよ　絶對の佛と釋尊の應現　迹門と本門の價値
『品』のこと　妙法蓮華經序品第一

本門と迹門

法華經の本文に入る前に、モウ一つ大事なことを申上げて置かなければならぬのは、法華經といふものは二十八品にわかれて居ります、これを昔から大體に於て二つに區別されて、その前の方の半分すなはち十四品を『迹門』といひ、後の方の半分を『本門』といつて居ります。これは隨分久しい間の慣用であります。日蓮聖人などはこの本門と迹門といふことを非常に重大に考へられて、題目を唱へ、本尊を定める場合に、いつでも『本門の本尊』『本門の題目』といつて居られまして、この本門、迹門といふ區別はかなり重大なものと考へられる。それはナニも日蓮聖人がはじめてさういふ事を唱へられたのではなくして、支那で天台大師が法華經を中心として佛教の全體を解釋される時に、すでにその區別を立てゝ、法華經を二つにハッキリ分けるといふことをして居られた。それ以來法華經を信ずる者は、此の

區別を無視する者はないのであります。これは專門的に言へば隨分難かしい事でありますけれども、難かしい事は追て申上げるとして、大體に於てなぜさういふ區別があるかといふことを申上げて置きたいと思ひます。

法華經の前の方の半分に於ては、お釋迦樣が『迹佛』として說明されてある、第一の序品から第十四の安樂行品までの間に說きあらはされた所に依るとお釋迦樣は迹佛である。それからその次の第十五の涌出品といふ所から法華經の末尾までに說きあらはされたところに基いてみると、お釋迦樣は『本佛』のあらはれたものだといふことになつて居るのであります。そこで、お釋迦樣を迹佛とみる方の部分は迹門で、お釋迦樣が本佛だといふことをハッキリと說きあらはされた後を本門といふことになるのであります。

本迹の字義

ところでその『迹』と『本』といふのはどういふ意味かといふと、まアその字だけの說明を申すと、例へば空に月がある、月は一つしか無いけれどもその月は海の水にも、川の水にも、泥溝の水にもうつる、茶碗に水を入れて戶外へ出せば茶碗にもうつるすなはち一つの月が幾つにもうつる。さうすると根本の月は一つだ、しかしその影を宿すものは幾つもある、と言へます。そこでその一つの月のことを本といつて、うつゝた月のことを迹といつて宜いわけであります。或は又モウ一つ譬をとつて言へば、人間が一人道を歩く、歩く人は一人だけれども、足跡は幾らでもつく、一町も歩けば其の間に足跡は何百つくか、何千つくかわからない、しかし人は一人である。さうするとその人は本であつて、その足跡は迹だ、といふ風に言へるわけであります。さういふ

やうな思想で本と迹とを分けるのであります。一つのものがさま〳〵なはたらきをする、そのさま〳〵なはたらきは皆一つのものゝ現はれたものに過ぎない、一つのものゝ相をあらはしたその作用、はたらき、斯ういふ風に言ふ。それが本と迹といふことの言葉の意味であります。

釋尊と本佛

お釋迦樣といふ方は、歷史上に現はれた事實だけで申しますと、印度の或る一つの國の王子としてお生れになつて、さうして人生のいろ〳〵な問題に就て疑をおこして、その疑を解くために世の中の生活を離れて出家して、ながい間研究を積んで、その結果みづから覺を開いてこれを世の中の人に說かれた、一通りの說法を終つて八十歲で入滅られた、といふのが歷史上の事實である。さういふ風に考へると、お釋迦樣といふものは今より二千何百年前に世の中に生れて、また二千何百年前になくなられてそれ以來再び世の中には戻つて來ない、限ある命を享けた吾々と同じやうな人間に過ぎない、といふことになるのであります。ところがさういふお釋迦樣のやうな佛樣が何故世の中に出られたらうか、といふ問題がおこりますときに、その限ある命を有つて限ある年月の間世の中で敎を說かれた佛樣といふものは、限ない命を有つた永遠に存在して居る佛樣が人間を救ふために相をあらはしたものだ、斯ういふ解釋がつくわけです。さうするとその根本のものが本佛といふことになります。

應身佛

これは初めから大層難かしい事を言ふやうでありますけれども、しかし此のところをハッキリさして置かないといけないのであります。一體私共はみな迷つた人間であり、またいろ〳〵苦みの多い人間で

すから、この迷を除きたい、或は迷を除きたいといふほど深入して考へないでも、苦みを離れたいといふクライな欲望は誰でもあるわけです。そこで苦みを除きたい、モウ少し深入して行けば迷を除きたいといふ欲望ですが、この欲望に應じてその苦みを除き、迷を去ることの出來るやうな教を與へる方がそこに出て來れば、衆が、これはまことに有難いと思つて、眞からこれに歸依するでありませう。さういふやうな方はいろ〳〵ありませうが、その教が極めて尊くて、極めて力のあるものでありますれば、一切の人間はさういふやうな教を說く方に心から歸依いたします、さうしてさういふ一切の人間をお救ひ下さるところのお情の深い方について深く感謝をするでありませう。

さういふやうに一切の人間に感謝され、一切の人間に歸依せられて、まことに廣大な慈悲を有つて居らつしやる方だといつて仰ぎ慕はれるやうな、さういふ方はこれは『應身佛』と言へる。應身佛といふのは慈悲を中心にした佛樣であります。『應』といふのは必要に應ずる、苦みを除きたい、迷を離れたいといふ要求をみな有つて居るのですから、その要求に應じてそこに出て來て、さうして斯うやれば苦みがなくなる、斯ういふ風にして行けば迷が無くなるものだといふことを教へて下さる、そのお教へになる心持は慈悲の心持である。すべての人間を救はう、すべての人間を安樂にしてやりたい、斯ういふ心持から教を說かれるのでありますから、左樣にして教を說かれる方を私共は佛として仰ぐのでありますが、その佛は慈悲のかたまりとしてみられた佛です。ですからこれを應身佛といふ。その場合に應じ、必要に應じ、對手に應じてそこに出て來て、それ〳〵適當な教を說かれる佛樣が應身佛であります

報身佛

ところが今度はその慈悲のはたらきといふものは一體何から出て來たのだらうと？考へる。吾々人間にそんなに有難い、尊い教を說いて下さるといふのは、どうして說いて下されるのか知らん。さういふはたらきが何處から出て來たらうと考へると、それはたゞ吾々に對して同情を有たれるといふだけでは出て來ない、可哀相だと思ふだけでは仕方がない。可哀相だと思つたつて、思つたら救へるといふものではない。例へば小さい子供が往來に轉んで泣いて居れば、吾々は抱き上げて家まで背負つて行つてやることが出來る、けれども四十二貫もあるやうな大男が往來に倒れて居れば、私共はそれを背負つてやるわけに行かない、背負へばこつちが潰れてしまふだから力に應ずるわけです、小さいものなら背負へるが、自分より大きいものは背負へないのですから……。そこで一切の人間が苦み惱んで困つて居るのを救はうといふならば、一切の人間よりも勝れた人でなければ救へないわけです。いくら可哀相だと思つたつて、どうも大闘や横綱を吾々が背負つて歩くわけに行かないと同じやうに、自分がつまらない者なら、世の中の苦んで居る者や惱んで居る者を救ふことは出來ない筈です。

それですからその廣大無邊な慈悲、一切の人を救ふやうな慈悲が具はつて居る方は、一切の人よりもモツと勝れた智慧を具へた、つまり何事も辨へた——すべての物の根本の原理、すべての事の根本の道理を奥の奥まで辨へた人であつて、はじめてさういふ慈悲のはたらきがおこるのだ、斯ういふ風に考へなければならない。自分が馬鹿では人を助けるわけには行かない、そこでその慈悲の化身であるところの佛樣が、どうしてもそれは廣大無邊なる智慧を具へた佛樣だと斯う考へる。佛樣をさういふ智慧のかたまりだと考へましたときに、その佛樣を『報身佛』といふ、これは智慧の化身である。その智慧の上か

ら慈悲が出て來る、自分が馬鹿でボンヤリして居つては、人を救ふはたらきなどの出て來るわけがないから、一切の人を救ふ教を與へる者は、一切の人間よりも優つた、天地宇宙の問題でも、人生の問題でも、ありとあらゆる問題を根本から解決し得るやうな、そんな智慧を具へた方であつてはじめて人を救ふ慈悲が出て來る、斯う考へられるのであります。さういふ風に佛を智慧の化身である、智慧のかたまりであると考へますときに、佛樣を報身佛と申します。

なぜ『報』といふ字を用ふかといふと、智慧といふものは磨かなければ出來上らないもの『でありまして』。初めからそんなに非常な智慧がそなはつて居るわけはない。であるから修行をして、だん〳〵修行に修行を重ね、努力に努力を重ねて磨き上げた結果その完全なる智慧が出來るのであります。ですから報は『むくひ』といふ字で、ながい間修行して、ながい間苦心努力したその報ひとして、（報ひは結果です）完全な智慧をそなへた佛樣である。斯ういふ意味で報身佛といふのであります。

例へばお釈迦樣ならお釈迦樣を考へたときに、これは一切の人間をお救ひ下さる方ですから、本當の慈悲のかたまりだとも考へられるけれども、その慈悲を成就するについては、決して初めから出來たのではなくして、さま〳〵な苦心をして、さま〳〵な努力をして、難行苦行を重ねた結果としてさういふ智慧をそなへ、さういふお力をおそなへになつたのですから、その意味から言へば、應身佛である方はまた報身佛でなければならない。すなはち修行した結果として廣大無邊の智慧をそなへた方でなければならぬと、斯う考へるのであります。そこで佛樣をみるのに、さういふ風に應身佛としてみることもありますが、今度は報身佛としてみることも出來るのであります。

法身佛

それからモツと進んで言ひますと、その修行して智慧をそなへるといふことは、一體どうして出來るのかといふ問題がおこつて來る。これは佛教ばかりではない、すべての教に於て考へられなければならぬ問題でありますが、無いものから有るものは出て來ない、いはゆる無より有を生ずるといふことは出來ません。これはモウ宗教でも哲學でも、何でもすべてのものに共通な原理であります。何にも無いものは、いつまで經つても無い、何にも無いものが有るものになるといふことは出來やしない。だからまるで何にも種の無いものは生えない、草の葉一つでも生えるのは、種があるから生えるのであつて、種の無いものから生えるものではない。それは今眼の前のところを言ふと、どつちがどうだかわからないでせう。昔の話に、鳥が卵を產むのか、卵が鳥を產むのかといふ話がある、これはチョットわからない『鳥が卵を產むのだ、だから鳥が初めだ』と言ふ、『けれどもその鳥といふものは卵から出るぢやないか、さうすると卵の方が先だ』と言ふ、『一番はじめはどつちだ？』『卵から鳥が出た、だから卵がはじめだ』『イヤその卵は鳥が產んだのだ、だから鳥がはじめだ』……どつちがどうだかわけが判らない。結局一番はじめに鳥があつたのか、卵があつたのか、誰も見た人はありはしないだから判らない。今眼の前の事を言へばわからんけれども、しかしながら何か初めにあつたに相違ない、鳥も卵も何にも無ければ、產むものが無いのだから、鳥も出て來ない、卵も出て來ない、何かあつたに相違ない。そのあつたものが鳥となつて現はれてそれから卵を產んだのか、或は卵となつて形を成してそれから鳥が出來たのか、それはどつちだか判らんけれども、とにかく何かとあつた。何にも無いものからあるものが

出て來やしない、斯ういふ事は考へられる。

それですから私共が教育を受けたつて、物を習つたつて、賴んだつて、テンで無いものはどんな方法を用ひたつて出來て來る筈がないのであります。そこで修行をして、その修行をした結果として智慧をそなへるといふならば、その智慧を成就するところの根本、その種は初めからあつたのではないか、といふことが考へられる。覺り得る種が無ければ、どんなに修行したつて覺れないだらう。物が識れるやうな素質がなければ、どんなに書物を讀んでも、人の話を聞いても、識るやうにはならないだらう、斯う考へられるのであります。

さう考へますと、智慧を成就したといふことは、本來具へて居る性質を完成した、出來上らせたのだといふ風に考へることが出來ます。恰も朝顏なら朝顏の種がある、その種はまことに小さい、こんな黑い粒子であるけれども種がある。だからその種を泥に埋めて、それに水をかけて、肥料を與つて、さうして溫かい陽の光にあてゝ置くと、これから芽が出て、蔓が伸びて葉が出てさうして花が咲く。その大きな花が咲いたのに比べると、小さいこれつぱかりの種とは比較にならないけれども、しかし其の種があつたからこそ花も咲いたのだ、斯ういふ風に考へられるのであります。もと〳〵種も何にも無ければ蔓も出ない、葉も出ない、花も咲かないだらう。それと同じことで、どんなに修行したつて、どんなに苦心努力したつて、まるで獸類と同じやうなものであつたら、いつまで修行しても覺も開けないだらうし、道も辨へられないだらう。況して人に教を說くことの出來ようの筈がないのでありますから、さうすると修行によつて智慧を成就したといふことは、本來そなへて居るところの尊い性質を養つて育てゝ伸して、それを完全にしたのに外ならぬだらう、斯う考へられて來るのであります。

そこで本來そなはれる尊い性質、斯ういふ意味に於て佛をみるときに、これを『法身佛』といふのであります、法身といふことは、本體として考へることであります。これを三つあはせたときに三身佛と申します。

三身佛
- 法身佛……本體
- 報身佛……智慧
- 應身佛……慈悲

私は今說明の時間をはぶくために、應身佛の方から逆に申しましたが、三身佛といふときの順序はこゝに書いたやうになります。たゞ初めからこの順序で說明すると面倒で、逆に申した方が說明が樂です。チョウド着物を着るときには、襦袢を着て下着を着て、上着を着て、それから羽織を着るのでありますが、しかし脫ぐときには羽織から脫ぐので、イキナリ襦袢から脫ぐわけにはいかない。本來は法身佛がもとで、報身佛、應身佛に出るのでありますけれども、說明するときには今申したやうに逆に、吾々をお救ひ下さる佛樣は慈悲のかたまりである、その慈悲は何處から出たか、智慧から出た、その智慧は何處から出たか、本來具つて居る性質が完成したのだ、と申す方がわかりよいのであります。本來の成立の順序から言へば、本來具へて居る本體があつて、それから修行に依つて智慧を成就した、その智慧がはたらいて慈悲になるわけであります。

一切衆生悉有佛性

そこでお釋迦樣といへども初めから佛樣ではないが、佛と成るべき本來の性質を具へて居られたといふことになります。ところでそれはナニもお釋迦樣お一人のことではなくして、吾々でもお釋迦樣と同じになれるやうな本來の性質は具つて居るのだといふことは、これは吾々が自惚れて言つたのではな

い、お釈迦様が覺を開いた後に吾々に向つてそれを請合つて居られるのだから、これは遠慮するには及ばないのであります。お前達は修行の仕方によつて自分と同じやうな智慧をそなへ、自分と同じやうな慈悲の力をもち、自分と同じやうな徳をあらはすことが出來るぞ、と佛様の方で言つて下さるのですから、それを吾々が『イエそれには及びません、この邊で結構です』と言つて尻込をするには及ばない話であります。それで吾々もやはり今のいはゆる三身をそなへることが出來る、その理由は判らぬ、吾々は凡夫だから理由は半らんけれども、しかし覺を開いたお釈迦様が吾々に向つて、お前達もたしかに出來るぞと請合つて下さるのですから、これは信じてよい筈でせう。それがあてにならぬと言ふなら、その人は一生涯自分で自分を葬つてしまふもので、仕方がないのであります。

そこで根本の問題は、モウ一つ遡つて、なぜ人々がさういふ覺れば佛に成るやうな性質を具へて居るのであらうか？　なぜといつてあるからあるんだ、と言つてしまへばそれまでの話ですけれども、さういふ佛に成るやうな尊い性質を具へて居る人が偶々あるのではないので、お釈迦様の仰しやるところに依れば、一切のものがみなさうである。『一切衆生悉有佛性』といつて、一切衆生ことごとく佛性ありといふことを言はれて居る。一切衆生といへば、生きて居るもの皆といふことです、一切のあらゆる生きて居るもの、そのあらゆる生きて居るものといふ中には、善人もあれば惡人もある、馬鹿もあれば悧口もある、金持もあれば貧乏人もある、吾々だつて一切衆生の中に無論入つて居るわけです。その一切衆生がみな佛性があつて、馬鹿だつて悧口だつて、善人だつて惡人だつて同じものだ、乞食だつてみな佛に成る種を有つて居るのだといふことを修行して後に佛に成られたお釈迦様が請合つて下さつたので

ありますから、これは吾々は信じてよろしいわけであります。

人は萬物と共に生く

又モウ少し深く考へますと、人間がみな佛に成る性質を有つて居るといふことだけで終らない、人間といふものは地面の上に生きて居る、天に覆はれて生きて居る、人間の周圍には山もあれば、川もあれば、草もあれば、木もある、鳥も啼いて居る、獸も走つて居る。若しこの人間と、人間の身を置いて居るところの天地のすべてのものとが根本から異ふものであるならば、吾々は一分間たりとも斯うやつて居られないだらう、といふ事が考へられるでせう。例へて言へば火と水とは異ふ、だから水の中に火を入れゝば消えてしまふ。火を水の中に入れてジューンと言はして、それで火は元の儘で居れといつてもそんなことは出來やしない、根本が異ふものは一緒には居られない。火といふものと水といふものは根本から異ふから、この異ふものを一緒に置けば片方は無くなつてしまふ、斯ういふ事はお互に容易に考へられます。さうすると、人間といふものと天地萬物と根本から異ふものであつたならば、チョウド火を水の中に入れゝば消えるやうに、人間がこの天地の間に生きて居られないで消えてしまふ筈ではないか、人間が生きて居られない筈でせう。然るに人間がこの地面を踏んで、蒼い天の下で山を見、川を見て、鳥や獸と一緒に、草や木と一緒に生きて居られるといふことは何のためだといへば、それは人間ばかりではない、人間の周圍のものと人間とが何等かの點に於て一致した、同じやうな性質を以て、同じやうな力の中で養はれて居るから、一緒に生きて居られるではないか、斯ういふことを考へなければならぬ。此の事は大事な問題ナンです、若しさうでなかつたら、吾々は斯うやつて居られやしない。チョ

ウド水の中に火を入れたやうに、ジューンと消えてしまふ。だから吾々は自分だけで生きて居るのではない、吾々が生きて居られるのは、水の中に投げ込んだ火のやうなものではないのであつて、人間の周圍の山でも川でも、地面でも天でも、鳥でも獸でも、草でも木でも、それ等が吾々と形は異つてもやはり何處か同じ性質があつて、何處か似かよつた力があるから、そこで斯うやつて所謂共存共榮で、一緒に住んで一緒に生きて居られるのです。

斯う考へた時に於て、人間が、俺さへよければいゝといふ考を起してはいけないのです。自分だけでありはしない、人は人として他の人のお蔭を受けるといふことは一通りわかりますけれども、他の人のお蔭ばかりではない、すべてのものゝお蔭を受けて居るでせう。例へば私共は毎日物を食べなかつたら死んでしまふ、物を食べて、食べた物が咽喉を通つてさうして腹の中を通り抜けて、その食べた物が腸や胃の壁に吸收されて、その吸收されたものが血ともなり肉ともなり、骨ともなり皮ともなつて吾々はこの身體を保つて居るのであります。だから食はなければ死んでしまふ。吾々の身體といふものは、親から生れた儘の身體ではありはしないのであつて、食物を攝つて斯うやつて生きて居るのです、飯を食つたり味噌汁を吸つたり、魚を食つたり大根を食つたりして、それがみな腸や胃の壁から吸收されて、骨ともなり肉ともなり皮ともなつたのです。さうしてこの骨や肉や皮の、永い間使つて役に立たなくなつたものは、汚い話ですが大小便になつたり、汗になつたり、垢になつて出たりするのですから、生れた時の骨でもなければ生れた時の皮でもない、みな他の物を食べて出來たものである。だから私のこの指はこれは大根のはたらきかも知れない、こゝらの指は魚のはたらきであるかも知れない、こつちの肥つた所は牛肉の脂であるかも知れない。さういふ風に考へて見ると、吾々がこゝに生存するといふことは、決して人間の力で出來ることではないのです。人間とあらゆるものとの力が一緒にはたらいて一緒に助け合つて居ればこそ、吾々人間といふものはこの世の中に生きて居られるのである、毎日を送つて居られるのであるといふことを考へなければならないのであります。

宇宙の偉大なる力

さうすると問題はモツと深入して來る。人が何故に人として生きて居るかといふ事と共に、人が何故に天地の間に養はれて、天地の間に哺まれて、あらゆるものゝ力をあつめて生きて居られるか、この問題であります。さう考へたときに、何か大きな力の内に一緒に保たれて、一緒に養はれて、一緒に生きて居るのではないか、といふことに想ひ到るでせう。これを偶然と思つてはならない、偶然といふのはそんな大きなものではない。何か必然的な廣大無邊な大きな力があつて、これがすべてを護り、すべてを育て、すべてを養つて行くのではないか。その大きな力が現はれて吾々の心のはたらきともなれば吾々の身のはたらきともなれば、吾々人間の毎日の動きとなるのではないか。斯ういふ風に考へて來なければならぬでありませう。

これはナニも佛教に限つたことではなくて、何處の國でもさういふ事は考へて居る。支那人はこれを『天』といつた、天の力があらはれてすべてのものになると言つた。又或る國民はこれを『神』といつた、神の力があらはれてすべてのものになると言ふ。近世の科學者はまた現象界の事柄から研究してこれを『力』といつた、一つのエネルギーのあらはれが、物質的のはたらきともなれば、精神的のはたらきともなる、といふやうに説明をして居るのでありますが、どこにもかくにも眞面目にしつかり考へて

行くといふと、何か根本の最も大きな最も微妙な、不思議な尊い或る力といふか、はたらきと言ふか、これは言葉はどうでも宜しいのですが、さういふものを考へなければならぬでありませう。

すなはち本佛

そこで佛教の方の立場から言ふと、人々がみな佛と成るべき本體を有つて居るといふことをだん〳〵考へて、その人々がまた地面を踏みながら、天に覆はれながら、草や木や、鳥や獣と一緒に生きて居ながら佛に成れるのであるといふことを考へました時に、一切をまもるところの、一切の存在の源であるところの一つの根本的の大きなものを考へなければならぬ、これを佛教では『本佛』と言ふのであります。これはどう言つても宜い、支那の孔子が『天』といつたのも此の事である、耶蘇が『神』といつたのも此の事である。或は今科學者が『エネルギー』といふのも此の事である。獨羅巴の哲學者が『本體』といひ、『絶對』と言ひ、スペンサーなどは正直な男ですから『何だか判らないもの』(Unknowable) と言つて居りますが、みなそれは誠心を以て心から求めると、何かさういふものに必ず到着するのであります。たゞ其のものゝ捉へ方は、完全なのもあれば不完全なのもある、一つのものを方々からみるのでありますから、其の一面をみて居る人もあれば、或はその全體をみて居る人もあるでせう。一部分を捉へて居る者もあれば、全部をしつかり捉へて居る者もある、捉へ方は完全なのもあれば、不完全なのもあるわけであります。

それで私共は、佛教の方から言ふ本佛といふ捉へ方が最も完全な捉へ方であると思つて、これを信じて居るのでありますけれども、しかし自分がこれを信じて居るからといつて、他のが全部贋物だとは考へないのであります。これを天といふ風にして捉へ

たのも、此の大きな根本のものゝどの部分かを捉へて居るのでせう。これを神といつて解釋したのも、此のものゝどの部分かを解釋したのでせう。科學者がエネルギーといふのも、此の大きなものゝはたらきのどの部分かをしつかり捉へて居るのであつて、これは贋物でもなければ、嘘でもない。たゞその捉へ方に於て、吾々が佛教に依つて教へられた本佛といふ説明の仕方、解釋の仕方が最も完全なものだと思ふから（これは今日話すだけではなか〳〵お解りにならぬと思ひます、これからだん〳〵申上げて行きますが）吾々は『本佛』といふ言葉でこれを解釋して居ります。とにかく何か根本のものが無ければならぬ、人間が偶然に生きて、社會の出來事が偶然に夢のやうに後から〳〵フツ〳〵と出て來るといふやうなことは考へられない。誠心を以て考へたときには、さういふいゝ加減な考へ方では濟まされないのであります。

本佛の慈悲のはたらき

そこで本佛といふものを一つしつかりと捉へるのであります。この説明は、法華經の第十六番目の壽量品といふところに行つて、さらにモッと精しく申上げることでありますから、今日はその邊にして置きますが、とにかくその根本の一つのものがあると、斯う思ふ。さうすると、人間が折角佛に成るやうな性質を具へて居りながら、それを自覺しないで自分で氣が附かないで、淺ましい眼の前の利害損得ばかりに逐はれて、大事な事柄を氣が附かずに居るといふことは、如何にも可哀相な事である、如何にも氣の毒な事である。その氣の毒な人間をどうかして眼を覺させてやりたい、どうかして、修行次第ではどれだけでも偉く成れるといふ事を知らせてやりたいといふ、一切をあはれむといふ心持が、その本佛の心の中に動いたときに、本佛はこれを捨てゝ置

くことは出來ない。そこでこの根本の佛樣が人間の身を取つて、吾々と同じ土の上に印度の國王の子としてあらはれて、吾々の踏んで行く道を身を以てお示し下されたのである、斯ういふ風に考へるのであります。それは或は豫言者みたいな者を下して、お前達は間違つて居るぞ、斯うやれと言つても宜いでせう、けれどもそれでは本當の敎にならないから、そこで絶對なる力を有つた根本の本佛が、その佛のはたらきの一部分として、肉體をとつて印度の國王の子としてこの地上に生れて、さうして吾々と同じやうにオギャア〳〵と生れて來て、吾々と同じやうに人の乳を飲んで育つて、吾々と同じやうに人生の問題をいろ〳〵考へて、さうして修行をして覺つて覺つた後に敎を說いて下さつた。さうして自分のやつた通りにお前達も修行しろ、さうすれば必ず結局覺は開けるぞといふことを、口でお敎へ下さるばかりではない、身を以てお敎へ下さつたのだといふことになります。

だから釋尊の御一代の事蹟といふものは、本佛が吾々にお與へ下さる敎の一部分である、一面である斯う考へるのであります。釋尊が悉達太子といふ王子となつて、印度の淨飯王といふ王樣の子として生れて、さうして出家して修行して說法して入滅して行つたといふ此の事は、これは歷史上の一つの事實であるが、その歷史上の一つの事實といふものは、無限の力を以て、無限の慈悲を以て、無限のはたらきを有つて居る本佛の吾々人生に與へられた救濟の一つの事柄である、救護といつて、吾々をすくひまもつて下さる一つの事柄だ、斯ういふ風にみて來るのであります。

一月萬影

これが本佛と迹佛との關係であります。チョウド空に在る一つの月が、あらゆる水に相をうつすやう

に、その根本の佛樣が吾々を救ふために、印度の國王の子といふ形をとつて此の世に現はれて、さうして釋迦牟尼佛といふ一生の八十年の生活を送つて、吾々に手本をお示し下された、吾々の向ふべき道をお示し下されたのであります。それを吾々が眼の前にみて居るのですから、吾々といへどもこのお釋迦樣のお通りになつたやうな同じ道を歩いて行けば、お釋迦樣がおさとりになつたやうな、覺が開ける、その覺が開ければ、吾々もお釋迦樣が一切の人をお救ひになつたやうなその大きな慈悲のはたらきを、自分の身に具へることも出來る、斯うなつて來るのであります。

そこに本と迹との關係がある。チョウド月が空にありさへすれば、海にも川にも相をうつすやうに、茶碗に水を入れて戶外へ出せばこゝにも月はうつるのであります。だから印度の國王の子として生れたお釋迦樣といふ一代八十年の事蹟は、近江の湖水にうつゝた月の影のやうなものかも知れない。小林といふ者はまことにつまらぬ人間だけれども、この取るに足らない私でも一生懸命にやつて居つたら、とても近江の湖水などには及ばんけれども、茶碗にうつる月か、或は蜆貝に宿つた雨滴にうつる月グライのことは出來るだらうと思ふ。努力次第に依れば、自分達は佛性を具へて居るのですから、やはりお釋迦樣の跡を逐うて相當な智慧をそなへ、相當な慈悲の力を具へて、周圍中に相當な惠みを與へ、恩を施すことは出來なければならぬ筈である、やつて見れば出來なければならぬと思ふのであります。斯う思ふときに於て吾々はたいへんに心に歡喜が滿ちて、自分達の一生涯が夢のやうなものではない、たいへんに價値のあるものだといふことが考へられて參るのであります。

さういふやうな意味で本と迹とを考へるのであります。根本の一つの佛樣が本であつて、その一つの

佛樣が相をあらはして吾々人間界にさま〳〵のはたらきをなさる、それが迹である、チョウドそれは大空の月がいろ〳〵な水にうつした影のやうなものである、斯うみるのであります。

顯はれてはじめて尊し

それならば、此の世にあらはれて吾々に教をお說きになつたその佛樣と、それから根本の、いま本佛と申しましたが、たつた一つしかない唯一の佛樣との間に、向ふは根本だから尊い佛樣で、印度に生れた佛樣は八十歲で死んだ佛樣だからつまらぬ佛樣だといふ風に其の間に優劣を立てる必要はないのであります。何故かといへば、根本のものがあつたからといつても、それが現はれなければ無いと同じではないか、そこが大事な問題です。物があつたつて、あるだけでは無いと同じ事である、あるものゝ其の力が現はれてはじめてある甲斐があるのでせう。例へば金庫の內に一萬圓の金が入つて居るといふことは、これは結構な事です、けれども、その金庫の金はいつでも役に立つて使へるかといふときに、『イヤ此の內に一萬圓あるのだ』と言ふだけで、いつまで經つても出して使はなければ、無くたつて同じことである。『一萬圓ある』『開けて見ろ』チャント一萬圓ある『けれども出さないのだ』と言つて、何百年經つても何千年經つても金庫は釘づけで金は出さないといふなら、其の人は金持とは言へはしない。金があるといふことは、使つてはじめてある甲斐があるのです。まアむやみに使つてはいけないでせうが、使ふべき時に使つてはじめて甲斐があるわけです。たゞ金庫の內に藏つて置くだけで未來永遠子孫にいたるまで一文も出さないのならば、あつても無くても同じことであります。それと同じやうに唯一の佛樣があつても、あるだけで其の恩惠が人間に及ばない。そのはたらきが人間と全く無關係であるならば、吾々人間の立場から言つてそんなものはどうでもよいのです、あつたつて無くたつて同じ事であります。

ところが其の一つの佛樣が、その力が現はれる。さうして釋迦牟尼佛となつて印度の國土に出現されて教をお說きになり、その教が永遠に人間を救つてさうして其の教はれた人間がまただん〳〵修行を積んで佛の境界に到達すれば、又他の人を救ふといふはたらきが生れるといふ風に、一つの根本の佛のはたらきといふものは、無限に際涯なくズッと世の中に擴がつて行くわけであります。そこが尊いのであります。根本のものは尊くて現はれたものはつまらぬと思つてはいけないので、その尊いものがあるから自然に現はれる、現はれるから尊い、どつちからも考へられる。又一面から言へば、さういふ根本の一つの佛樣が存在されゝば、それは現はれざるを得ないものだ、といふ風にも考へられる、無限の力をもち、無限のはたらきを有つて居られるから、其の力、そのはたらきがどうしても現はれなければならぬ、現はれるのが必然だ、斯ういふ風にも考へられるのであります。でありますから本佛と迹佛と對したときに於て、本佛は尊いが迹佛はつまらないとか、本佛が根本であつて迹佛はどうでも宜いとかいふ風に考へるならば、それは宗教といふことの意義を全く辨へないことになります。宗教といふものは人間を離れて宗教は無いのでありますから、その本佛の大慈悲が人間に現はれたといふことを考へましたときに、吾々は本當に有難い、慈から尊いといふ心持が起るわけであります。

支那の僧肇といふ人がそのことを說明して斯う言つて居ります。

『本に非ざれば以て迹を垂るゝこと無く、迹に非ざれば以て本を顯はすこと無し。本迹殊なりと雖も而も不思議は一なり。』

（非レ本無ニ以垂レ迹。非レ迹無ニ以顕レ本。
本迹雖レ殊。而不思議一也。）

『本に非ざれば』――根本のものがなければ、『迹を垂れる』といつて、その形をあらはすことは出來ない筈ではないか、けれども、『迹に非ざれば』――形をあらはして見なければ、『本を顕はすこと無し』で、その根本のものがあるといふことが人間にわからんではないか。だから『本迹異なり』で根本のものと形をあらはしたものとは異ふけれども、そのはたらきが實に不思議な、實にどうも人間の考へ及ぶべからざる、尊いはたらきであるといふ點に於ては同じだ。本佛なら尊いけれども、迹佛はどうも……などゝ言つて其の間に人間が擅に區別を立つべきものではない、斯う言つて居るのであります。

釋尊を模範とせよ

私共はお釋迦様といふ方を通して本佛を仰ぐより外に、本佛を仰ぐ道はないのであります。これはモッと先へ行つて言はなければならぬ信仰の大事な問題でありますが、お釋迦様を通して本佛を仰ぐのであります。イキナリ本佛といふことを考へて『何處かにえらい佛様があるだらう……』などゝ思つても、それは夢みたいなものです。お釋迦様の御事蹟を通して、お釋迦様の御慈悲のはたらきを通して、その向ふに本佛といふ、永遠の生命のある、絶對の力のある佛様をみる、といふことになるのであります。若しそのお釋迦様のはたらきを通さないで、そこを無視して、一足飛びに本佛といふ何か絶對のものがあるのだと思つて、そこに掌を合せるといふことになれば、それは夢みたいな話であります。『何だか知らんけれども有難い佛様があるさうだ……』それはいけない、さういふのは健全な信仰ではない。本當の信仰といふものは難かしいことなので、活きた事實を通して行かないといけない。たゞ一足飛びに、「この天地宇宙の間に一つの根本のものがある、それが有難いのだ……」といふやうな事ばかり考へて居ると、それは道を歩かないで富士の山の天邊を見て居るやうなものです。「彼處に行けるのだ」といふ、しかし富士山の天邊へ行くには、足で歩いて行かなければいつまで經つても行けはしない行くためには一歩々々地面を踏んで行かなければいけないのであります。本佛といふ根本の佛様があるその佛様に歸依するのだ……と言つても、本當に歸依するには、その力があらはれて人間界の救濟者となつたお釋迦様の教、お釋迦様の事蹟、お釋迦様の活動を通して、さうして根本のものを仰ぎ慕ふといふことになつて、はじめて本當の活きた信仰がそこに湧いて來るのであります。

此の事はモウ少し先へ行つてから尚ほ繰返して申上げたいと思ひますが、初めに皆さんがしつかりと考へて置いて戴きたい事であります。夢を見て居てはいけない、「何だか有難いものがあるさうだ……」と言つて、空を仰いでボンヤリして居てはいけないのであつて、どうしても活きた事實を基礎にして行くといふことで、はじめて私共もそれに見習つて、まことに力及ばぬものだけれども、その佛様の活きた御事蹟をお手本として、いさゝかなりともそれに近い行ひをしたい、又その御力の幾分かのお手傳をもしたい、斯ういふ心持がおこつて來るのであります。

絶對の佛と釋尊の應現

これは宗教の信仰の非常に大事な點であります。少し言ひ過ぎるやうですけれども、德川三百年の間の佛教といふものは、こゝの所をいゝ加減にして居つた。チト亂暴な事を言ふやうですけれども、本當に言へばこゝの所をいゝ加減にして居つた。「阿彌陀様が有難い」、「藥師様が有難い」、「大日如來が有

難い」、「妙法蓮華經が有難い」……そんな事を言つて居つたけれども、それは人間といふものからスグ一足飛びに根本のものを見ようとして居る氣味がある。「阿彌陀樣は有難い、西方の極樂淨土で大きな光を放つて居る……」、「大日如來は有難い……」、「妙法蓮華經は絶對だ……」、そんな事ばかり言つて居つて、その佛樣が人間を救ふために茲にお釋迦樣となつてあらはれて、慈悲のはたらき、教を說くとか、世の中を善くするといふ尊いはたらきをして人間に教を與へられた、その根本のものと、吾々の前にあらはれたお釋迦樣とのつながりを忘れて居つた。それだから佛教といふものが人生と關係がない「後の世になつたら佛樣のお側へ行けるだらう…」こんなことばかり考へた、それではいけないのです。此の世に於ける吾々の一歩々々が、お釋迦樣の八十年の御はたらきの眞似をする——眞似と言ふと話が惡いけれども、それに倣ふのであつて、それを倣ふことに依つて、お釋迦樣の心持と一致した心持が出來て、お釋迦樣の行ひと一致した行ひが出來てさうして吾々が根本の佛樣と一致し得るのである、斯ういふやうに考へなければ、たゞ夢みたやうな話で居るならば、宗教もナニも要つたものではないのであります。その事は法華經の本文を讀んで見ますと更に明確になつて參りますので、私が今こゝで少しばかり申上げたところが極めて不完全な說明に過ぎません、その委しい事はお經の本文に就てだん〳〵申上げて參りますが、一番初めにその覺悟を定めないといけないのであります。

私共は法華經を學ぶことに依つて、お釋迦樣といふ吾々と同じ地面の上に活きてはたらいて下さつた其の方の行ひ、その方の教、その方のお心持を吾々の心持として、それによつて、絶對の、モウ世界にたつた一つしか無い絶對の佛樣と一致し得るやうな生活に入るのだ、斯ういふ風に思ふのでありま

す。若しそれが、お釋迦樣といふ方は八十年で死んでしまつた方に外ならぬ。三千年の昔に出た偉い人に過ぎないといふならば、それは今とは時代が違ふし、今とは周圍の樣子が違ひますから、モット善いものがありはしないかといふ疑問も起るのでありますが、それは絶對なる佛が釋迦牟尼佛としてあらはれたのであるといふ、そこの關係を忘れないやうにしなければならぬのであります。此の事はこんな說明ではまだ〳〵盡したものではありませんから、更に本文に入つてからモウ少し詳しく申すことにいたしませう。

迹門と本門の價値

そこでお釋迦樣を、八十年で死んだ佛樣だといふ說明の仕方をするのが、法華經の前の半分であつてそこにはまだ永遠の本佛のあらはれだといふ事を言つてありません。第十五の涌出品といふ所から後になると、その八十年の命をとつてあらはれたお釋迦樣が、無限の生命を有つた佛樣のあらはれたものに過ぎない、斯ういふ說明になります。それで前の方を迹佛といひ、後の方を本佛といふ、お釋迦樣が迹佛として說きあらはされた前の半分を「迹門」といひ、お釋迦樣が本佛だといふことを本當に打あけて說かれた後の半分を「本門」といふのであります。

これは本迹といふことの說明をしようと思つて大分深入りをいたしましたが、私共の絶對の信仰を決定するのは、お釋迦樣を八十年で亡くなつた方と思はないで、永遠の生命を有つた佛が假に人間にあらはれたものだといふ風に考へて、はじめてこれに眞心から絶對の信仰を打込むことが出來るのであります。それで日蓮聖人は本尊をお書きになるときに「本門の本尊」と仰しやつた、題目をすゝめられるときに「本門の題目」といふことを仰しやるのであります。

大體さういふ風に法華經を二つに分けまして、その前の方の述門からお話を進めて參るのであります。しかしながら今もお斷りしたやうに、前の方は迹佛としてのお釋迦樣を說いたのだから、後の方よりはつまらないものだ、ナンと思つてはいけないのであつて、人間にあらはれなければ絕對の佛があつたつて無くたつて吾々に無關係でありますから、あらはれた佛の所から、これは非常に尊いものだとして考へなければいけない。「初めの十四品はどうでもいゝ、いゝ加減にして置け、後の半分になつたら本氣にならう……」といふやうな考ではいけない。やはり最初から本氣に讀んで行かなければならぬのであります。

「品」のこと

それからお經の本文には「何々品」といつて「品」といふ字が書いてあります、これはものを分ける、

「わかち」といふことで、何々の部とか、類とかいふ意味に解してよろしい。一番最初に「序品」とあるのは、これからモッと深い方へ入つて行くために說かれたその部分、それから第二番目の「方便品」といふのは、方便といふことについて說き明されたその部分、斯ういふ意味であります。英語の「パート」といふ語がよくこれに當ります、初めのパート、次のパートといふことであります。序品といふのは、先づ以てお釋迦樣が說法をなさるその準備として、お釋迦樣の口をお開きになる其の際の事情、その前後の樣子等を說き述べたものであります。ですから序品に於ては、お釋迦樣御自身のお說は一つもない釋尊が口をお開きになるまでの靈鷲山に於ける光景周圍の人の心持といふものがあらはれて居るわけであります。前置はその位にして、これから本文に入ることにいたします。

妙法蓮華經序品第一。

これは今まで申したところでお解りになるであらうと思ひます。

是の如く我聞きゝ（如是我聞）

前にお經といふものゝ成立を申上げました通り、お經はお釋迦樣が御自分でお書きになつたのでもなければ、そこに敎を聞いて居る人が直接筆記したのでもない、これは語り傳へたものを後に書き錄したものであります。ですから此の法華經を書き錄した人が、自分は斯ういふ風に聞いたといふのが「是の如く我聞きゝ」といふことであります。

「如是」といふことには二つの意味があります。一つは、たしかに此の通りといふ意味で、いゝ加減に聞いたんではない、居睡をしながら聞いたとか、外見をしながら聞いたのではない、本當に自分は一生懸命に聞いた、自分の聞いたところに依ると、これより外ない、此の通りだ、斯ういふ意味に「如是」といふ字が使はれて居ります。しかなしながら佛でない者が佛の敎を聞いたのだから、若し間違があれば自分の責任だ、といふ意味もある。だから「如是」といふ二字には、たしかだといふ確信の意味と、しかし若し間違へば自分が間違つたので、自分が責任を負ひますといふ意味と、兩方含まれて居るわけです。一面からいへば非常に大きな語であつて、一面からいへば非常に謙遜した語であります。自分の聞いた所に依るとたしかに斯うだ、しかし若し間違があれば自分の聞き方が間違つたのかも知れない、一切自分の責任であるといふ。この頃の雜誌に「文責在記者」とあるのとは少しちがふ、あれはいゝ加減に、締切に間に合はなくなつて來ると「文責在記者」でやつてしまふ、さういふのとはちがふ、確信をもつて自分は斯う聞いたといふのであります。

一時、佛、王舍城の耆闍崛山の中に住したまふ

（一時　佛住三王舍城耆闍崛山中）

ある時、佛、すなはちお釋迦樣が、王舍城の耆闍崛山の中に居らつしやつた。「佛」といふのはナニもお釋迦樣に限つたことではない、前に申したやうに三身佛といふのはみな佛であります。けれどもこゝではお釋迦樣のことを言つて居る。佛といふことは印度の言葉でいへば、佛陀といふことで、支那の言葉に譯せば覺者といふことでありますから、覺つた者が佛である。覺つたといふのは、たゞ學問して物が解つたといふだけではない、前に申したやうに本來具へて居る性質を遺憾なく發揮したものが覺つたといふのですから、たゞ書物を讀んで物が解つたといふやうな、そんな淺い事ではない。本來具有して居るところの尊い性質を遺憾なく發揮して、絕對の眞理をしつかりと捉へたもの、斯ういふことが佛陀といふ意味であります。これはお釋迦樣だけには限らない、他にも佛樣がある、まア吾々の知つて居る限りでも、阿彌陀佛といふのもあれば、多寶佛といふのもあれば、そのほか澤山ある、みなそれは覺つた方である。ところが吾々の踏んで居る地面と地續きの同じ地面の上に人として生れて佛に成つた方は、釋迦牟尼佛より外ない。佛といふものは幾らもあるだらうけれども、この土の上に吾々と同じに生れて、吾々と同じに人間の乳を飲んで育つて、吾々と同じやうに米か麥か知らんがさういふ物を食べて大きくなつて、さうして佛に成つた方といふものは釋迦牟尼佛より外ない。だから吾々は如何なる佛の教を學ぶにしても、釋迦牟尼佛を緣として學ばなければ、一足飛びに學ぶことは出來ないのです。ですから佛教といへばお釋迦樣の教である、それはお釋迦樣のお教へになつた中には、お釋迦樣以外の佛樣のことも說いてあるけれども、それは吾々と同じ土の上に生れた佛樣ではない、吾々と同じやうに赤ん坊から大人になつて行つた佛樣ではないから、吾々はお釋迦樣を緣として、お釋迦樣を通して學ばなければ、その佛を學ぶことは出來ない。例へば阿彌陀佛のことでも、お釋迦樣が說いて居らつしやる、大日如來のことでも、お釋迦樣が說いて居られる、お釋迦樣といふ佛樣を通さないで、吾々はいろ〳〵な佛樣に親づくことは出來ないわけであります。

それですからたゞ『佛』といへばお釋迦樣のことになる。若し別の語を使へばそれは別です、何々佛といへば別の佛樣でありますが、若し人間界に居る者が肩書をつけないでたゞ『佛』と言つたら、それはお釋迦樣のことにきまつて居る。なぜなら、娑婆世界に現はれた佛樣といふのはお釋迦樣よりないのですから、そこの所は間違のないやうにして戴きたい。若し日本で花といへば櫻のことです、花見に行くといへば櫻の花を見に行くことです。「花を見に行きませう」「何の花ですか」と言ふ者はない、「花見に行かう」「ペン〳〵草の花を見に行くのか」ナンと言ふのは馬鹿者です。花見といへば櫻花を見に行くに定つて居ると同じやうに、この娑婆世界で佛といへばお釋迦樣のことです、他の佛樣をいふ時には何々佛といふ肩書が附く、これはモウ定つた事であります。

それで釋迦牟尼佛といふ語はこゝには出て居りませんが、これから吾々は釋迦牟尼佛の教を學ぶのでありますから、先づ「釋迦牟尼」といふ語の意味を辨へて置くことが必要であると思ひます。「佛」は今申したやうに覺者の意味ですが、「釋迦牟尼」といふのはどういふ意味であるかといふと、これはいろ〳〵な說明がありますが、天台大師のお說きになつた說明が、短いけれどもよく要領を得て居ります。それに依ると、勿論これは梵語ですから、漢譯すると、釋迦といふことは「能仁」といふ意味で、牟尼といふことは「寂默」といふ意味であります。能仁といふのは一切の人を救ふ力を有つて居るとい

ふ意味で、すべての人を救ふ力を「仁」といふ字であらはした、それから寂默といふことは、どんな場合でも少しも周圍から影響を受けず、變化を受けないといふことです、寂といふのは動かないこと、默は默つて居るといふ字ですが、これは周圍に依つて影響されないこと、だから寂默といふのは、絶對の眞理をさとつて、如何なる境遇に居つても、如何なる場合に居つても少しも動かぬ、少しも周圍から變化を受けない、周圍の者のために動かされないといふこと、言換へれば寂默といふのは絶對の覺を得たといふことであります。人間は迷つて居るから周圍に依つて動かされる、本當に覺つて居れば動きはしない。解つて居れば人間は驚きはしない、解らないから驚くのです、大正十二年の震災だつて、明日の十二時に大地震があると判つて居れば、あんなに騒いだり慌てたりしなかつたのですが、不意に來たものだから驚いてしまつた。判つて居れば驚くものではない。だから人間が本當の覺を開いて居れば寂默です、どんな變化があつたつて平氣で見て居られる。どんなに周圍から力が加はつても、そのためにどクともするものではない、だから寂默であります。能仁は一切の人を救ふはたらきを有つて居る、寂默は佛樣の絶對の眞理をお覺りになつたその境遇であります。そこでそれを一緒にして能仁寂默——釋迦牟尼といふのであります。その意味を天台大師がさらに説明して

『寂默の故に生死に住せず、能仁の故に涅槃に住せず』

（寂默故不レ住二生死一。能仁故不レ住二涅槃一）

と言つて居ります。自分は『寂默』で本當に絶對の眞理を覺つた、どんな境遇に居たつて何ともないといふだけの覺を開いたから、『生死に住せず』で、人間が生きるの死ぬの、繁昌するの貧乏するの、そんな事に少しも囚はれやしない。しかし『能仁』といつて一切の人間を救ふといふことを志して居るから、『涅槃に住せず』——涅槃はさとりですが、その覺つた境界にヂッとして居ない、覺つた身を以てわざ〳〵迷つた人間の中に入つて來て、迷つた人間と一緒に生活してこれを救ふやうになる、斯う説明して居りますが、そこの所が大事です。自分は迷から離れて居るのですけれども、俺は迷はないぞといつて、世間が迷つて居るのに、自分は覺つたと言つて濟して居つてはいかん、覺つた身を以て、涅槃の中にヂッとして居ないで、世の迷つて居る人間の中に下り立つて、彼等と共に住んでさうして彼等を救ふために骨を折る、茲に佛の本當の慈悲心といふものがあるのであります。さういふのがお釋迦樣の本來の性質である。

だからお釋迦樣は、絶對の覺を開いて居らつしやるからといつて、決して迷つて居る又苦んで居る吾々を隔てられない、吾々迷つた凡夫の中に一緒に入り込んで、さうして吾々と共に進んで吾々を導いて下さる、そこに佛の本當に有難い所がある。これを佛教が支那に渡つて後に、支那の言葉を應用して佛を説明して

『光を和らげ塵に同じふす』（和光同塵）

と言つて居ります。これは一體は『老子』の中の語ですが、その語が如何にも佛樣を説明するに適切であるといふので、支那に渡つて後の佛教では、佛を説明するのにこの語を使ふのであります。和光同塵といふのは、太陽のことを言つたものです、太陽といふものが高く空に懸つて居つて、まことに清らかな光を放つて居るのですが、その太陽が地面を照すときには、汚い物の上を平氣で照す、太陽そのものはきれいなものである、少しも穢れを帶びて居ないけれども太陽の光が地面を照すときには、どんな汚い物でも平氣で照す、泥溝の中でも、犬の糞の上でも、少しも汚い物を隔てない、だから光を和らげる

本來清らかな光だけれども、その光を和らげて塵に同じふする、汚い物と一緒になつて、汚い中を平氣で照して居るといふところに、陽の光の尊さがある。それと同じやうに本當に覺つた人は、自分が覺つたと言つて神經質になつて世間を離れてしまつてはいけないので、世間の迷つた人間と一緒になつてこれに救ひを與へる、斯ういふ心持をもつのであります。それが佛樣のお慈悲でありまして、佛樣の道を學ぶ私共は及び難い事ではあるが、やはりさういふやうな心持をもたなければならない。ウッカリすると、信仰のある人が神經質になり過ぎていけない、『彼奴は無信仰だから相手にならない』などゝ言ふ、さういふ心持はいけません。『彼奴は無信仰だからモウ話をしない』などゝ言ふけれども、生れたばかりの赤ん坊はみな無信仰です、信仰しながら生れて來る者はありはしない、無信仰だから相手にならぬといふなら、赤ん坊を育てないで、みな捨てゝしまふが宜い。さういふ狹い考ではいけない、初めはみな解らないのだから、解らしてやらなければいけない、初めはみな馬鹿ナンだから、それを賢くしてやらなければいかん。いつでも佛の大慈悲心をお手本とするといふ心持を忘れてはならぬ譯であります。さういふ佛樣が三千年の遠い昔に世の中に御出現になつて、さうして吾々のために教をお說き下さつたのでありますから、これはまことに有難い事です。

『王舍城』といふのは、城は元來都のことです、都の名がやがて、國の名になつたのもあります。王舍城といふところです。その王舍城のそばの耆闍崛山といふ山の中に、お釋迦樣がお在でになつた、『耆闍崛』といふのは梵語で、支那の語に譯すれば『鷲頭』といふ意味、山の形が鷲の頭によく似て居る、だから耆闍崛山といふ。直譯すれば、鷲頭山といつても宜いけれども、その耆闍崛山といふ所はお釋迦樣

が何遍もお出でになつて、大變お氣に入つたと見えて、何度もそこで教をお說きになり、殊に一番終ひには此處に八年お在でになつて、これからお互に讀まうとする法華經をお說きになつたので、此處は特に尊い處ですから、そこで支那に佛教が傳つて後にこの上に靈の字を冠けて、靈鷲頭山では調子が惡いからこれを略して「靈鷲山」といふやうになつた。これは言葉の口調ですから、場合に依れば半分略する、此の頃は言葉を略することが流行るけれども、昔からさうです。靈鷲頭山では何だか讀みにくいから靈鷲山といふ、例へばデパートメント・ストアといふのを略してデパートだけで濟して居るやうなものです。

それで耆闍崛山の中に住したまふ——山の中に住したまふといつて、ナニも山住をしたわけではない、そこにチャンと教を說く場所がありまして、そこに集まつて教を伺つたのであります。その教を說く場所を「精舍」といつて居ります、「祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響あり」などゝいつて、有名ですが、祇園精舍ばかりではないいろ〳〵あつた。それは教を說く場所であります。精舍の「精」は雜りのない心持を以て修行すること、教を說く者も、一切の人間を救ひたいといふ心持だけで、少しも雜りがない。聞く方も、どうぞ本當の道を學びたいといふ心持で雜りがない。雜りのない心持で修行する場所であるから精舍といふ、即ち今のお寺のことであります。

附たりに申しますが、「寺」とか「院」とかいふ字は元來役所といふ字です。院の字は今でもその意味に使つて居ります、樞密院、會計檢査院、大審院などゝいふのはそれです、日本では寺の字は役所に使つて居ない、大審寺とか會計檢査寺といつてはチョット工合が惡い。しかし寺と院は共に役所といふ意味です、支那では昔何々寺、何々院といふのはみ

な役所であつた。支那の後漢の時代に佛教が印度から支那に渡りました際に、まだお寺といふものが建ちませんから、役所へ佛像を置いて、役所に坊さんが滯留して、さうして役所で説法をした、その爲に役所といふ字（寺又は院）が説法する所、或は佛をまつる所といふ風に使はれるやうになつて、今日では寺とか院とかいふのは、お寺のことになりましたが、元來は役所といふことです。教を説く場所は、本當の意味では精舍といふべきであります、祇園精舍とか竹林精舍とかいふのは、みな教を説く場所であります。

ですから今日のお寺がチョウドそれに當ります、昔は精舍といつた。精舍は教を説く場所であつて、葬式をする場所ではない、葬式は昔は墓地でしたものです、ところが後に葬式が非常に華やかになつて會葬する者も多くなつたから、墓地では狹いといふので、據ろなしに精舍を借りて葬式をしたのであつて、葬式といふことは精舍の本當の仕事ではない、假の事です。それが後になつては葬式の方が專門になつてしまつた、今では葬式ばかりやつて居つて教を説かないお寺もあるけれども、それは本末顚倒です。教を説かなければお寺ではありはしない、葬儀場です。

精舍といふのはさういふわけで教を説く場所であつて、佛樣が教をお説きになる、若し佛樣が居らつしやらなければ、佛樣に代つて他の德の高い人、或は智慧の深い人が教を説いたものであります。ですから精舍に集つた者は、雜りのない心持をもたなければならぬ、雜りのない心持といふのは、説く人はどうかして一切の人間を救ひたいといふ心持、聞く人はどうかして人間の道を辨へたいといふ心持、それでなければ雜りのない心持とは言へないのです。私はよく宗教關係の學校の學生などに言ふのであります、どうも教を説くのに方つて精舍のつもりにな

らないで、「これを一時間やつて幾らになるだらう……」ナンといふ氣持でやる、怪しからぬ話である、そんなことでは精でも何でもない、雜つて居るぢやないかと言ふのでありますが、兩方が雜つて居つていけない。教を説く方も、「幾らになるだらう？」と思つて居る、聞く方も「信心したらどの位儲かるだらう？」といつてやつて居る「今年で三年やつたけれどもチッとも儲からない、成田山の方へ宗旨替へだ」といふやうな人がある、兩方ともいけない。精でなければいけません。昔は精舍で教を説いた、靈鷲山にも精舍があつてそこで教を説かれたのであります。

これから以下は、お釋迦樣が教をお説きになる時にはその數を聞くために多くの人が集まるのでありますが、その集まつた人を茲にズッと並べてあります。その名前は一通りたゞ名前の説明をするだけにして置いて、其の一々の人の事蹟やナニかは略して行きたいと思ひます。そこにはいろ〳〵の種類の人が集まつて居りますが、先づ第一に擧げられたのが大比丘衆です。

大比丘衆、萬二千人と俱なりき。

（與二大比丘衆、萬二千人一俱）

佛樣の直接のお弟子といふものは四種しかない、それは何かといふと

比丘
比丘尼
優婆塞
優婆夷

であります。比丘と比丘尼は出家の方で、比丘は出家した男、比丘尼は出家した女のことです。出家といふのは無論妻子眷屬を有たない、身一つになつてしまつたもの。それから優婆塞と優婆夷は在家の方で、在家の男と女、吾々のやうに女房もあれば子供も有つて居る、兄弟もある、普通の生活をして居る

者、其の男が優婆塞で、女が優婆夷であります。比丘はやはり梵語であつて支那の語に譯すれば「乞士」といふこと、比丘尼は「乞女」といふこと、優婆塞は「清信士」優婆夷は「清信女」といふことであります、これがお釋迦樣のお弟子の全體であります。

乞士、乞女の「乞」といふのは、お貰ひ申すことでありますが、何を乞ふのであるかといふと

「法を佛に乞ひ、食を人に乞ふ」

（乞ニ法於佛。乞ニ食於人ニ）

敎の方を佛樣に戴き、食ものは世間の人に貰ふ。さうしてこの「乞」といふ意味は、たゞ貰ふのではない、感謝して貰ふのです。だから感張つて貰つてはいけない、佛樣に敎へて戴くのですから、「敎へて呉れッ、敎へなければ承知しないゾ」……そんなことを言ふ奴はない、丁寧に敬ひ虔んで敎を乞ふのであります。食を人に乞ふといふのでも、そんなに感張つて貰ふべきものではない、自分は耕さずして人の耕した米を食ひ、自分は織らずして人の織つた着物を着、自分は家を建てないで人の建てた家に住むのですから、あらゆる人の行爲に對し、あらゆる人の恩惠に對して感謝するといふ心持がなければならない。「食」といふのは食ものばかりではない、すべての生活の資料、それを人に乞ふ時には、感謝して貰ふといふことが大事です。

これは敎を說く人ばかりでなく、私共も敎育の方の事をやつて居りますが、斯ういふ敎を說くとか道を說くとかいふ人間は、自分で一文も金を儲けることは出來ない、自分で世の中の富を增すことは出來ないのでありまして、人が働いて殖して呉れたその結果を以て食ひもし、着もするのですから、一粒の食たりとも、一尺の布たりとも、深く感謝するといふ心持が無ければならぬ。それを大感張で取つてはいけない、お布施が少いなどゝ言つて文句を言ふのは以ての外である、電話で談判するナンといふの

はます〳〵いけない。人の骨折つたものをたゞ貰ふのですから、感謝して貰ふ、一粒の米でも有難いと思つて貰ふ、それが乞といふことの本當の意味であります。もとの佛樣のお弟子はみなさうやつたものであります、だん〳〵世の中が末になつて來るといろ〳〵の事になつて、世間の方からも「一體いくら上げませう？」などゝ言ふ人が出て來たりしますがどんでもない話で、元來は今申した通りの精神でなければならない。

それは出家の方でありますが、在家の方は清信士清信女でなければならない。「清信」とはどういふことか、それは敎が有難いと思つて信ずる、佛の敎といふものは人間の道を敎へるもので、人間の人間として生きる道を敎へるものである、敎を學んでは じめて人間が人間になれるのだから有難い、斯う考へて信ずるのが清い信である。それを何等かの利害損得の問題を中に入れて信ずるならば、それは清信ではない、そこはよく考へなければいけない。どうも世間がそれでいけない、人間の道を學ばうと思つて佛樣や神樣に詣る人は極めて少數である、何か求める所があつて詣る人が多い、十錢の白銅を一つ投出してボン〳〵とやつて「どうぞ百圓儲けさして下さい」……そんなうまい事が世の中にありますか。十錢で百圓儲ける、これは一種の取引でせう、怪しからぬ話です、さうかと思ふと「頭が痛いからなほして呉れ」「足が痛いからなほして呉れ」子供が百日咳を患つて居るからこれを十日グライにして呉れ」といふやうなことを言つて賴む、「十日で咳が止んだら鳥居を上げます…更めてお布施を致します」……懸賞問題で信仰をして居る、途方もない話です。さういふことだから信心といふものが意味を成さない、自分の心は舊の儘にして置いて賴まうといふ、だから賴んでいゝあんばいに効くといふと「大きに有難うございました、又上ります」と言つて歸つて

しまふ、事の無い間は忘れて居る、事があると又出かけて行く、此の間はお蔭で頭の痛いのがなほりました、今度は足が痛いから足の方を願ひます」……まるで按摩をやとふやうな心持である、さういふことではいけない。それでは何のために信を勵むかわからない。

そこで清い信でなければならない。自分が佛を信ずることに依つて、自分が敎を學ぶことに依つて、自分自身が心が清らかになる、自分自身の心が蘇生つて行くのだ、心を立てなほすためだ、斯ういふ風にして信ずるのが清信であります。それが男であれば清信士、女であれば清信女といふのであります。

さういふ出家の男女と在家の男女に依つて、佛の敎といふものが學ばれ、また世に弘められるのです。その中の殊に行ひも勝れ、德も秀でゝ居る者を大比丘といふ、「大」は褒めた言葉であります。「大比丘衆萬二千人と俱なりき」――多勢の大比丘衆が

六〇

みな一緒に敎を聞くために集つて居つたといふのであります。

皆是れ阿羅漢なり。（皆是阿羅漢）

「阿羅漢」といふのは梵語で、「殺賊」と譯する、賊といふのはまよひのこと、まよひをスッカリ無くした人を阿羅漢といふ、これを略して「羅漢」とも言ひます。まよひといふことは、こゝでは普通のまよひを言ひます、金が欲しいとか、着物が欲しいとか、憎いとか、忌々しいとかいふやうな世間のまよひ、それをスッカリ離れつくした者が阿羅漢であります。けれどもまよひを無くしたゞけで終るのではい、こゝではサウ申して置いて、後に行つて又申上げますが、それだけで終るのではない。まよひを除くといふことは、さらに世のため人のために力を盡す修行を積むその準備でありまして、まよひが無くなつたからそれで濟んだといふものではありませんが、しかし一通りまよひが除かれなければいけない

のです。そこで皆是れ阿羅漢である、そのお弟子達はモウ永い間修行を積んで世間に對するまよひの無くなつた者であつたさういふ人々が四十何年の間佛樣の敎訓を受けまして、よほど進んで來たので今度はその人々に對してさらに一歩進んだ上の敎を說かう、斯ういふ事が法華經を說かれる一つの目的になるわけであります。

（第三講了）

新案第176867
特許第179231

クオン、カラー

詰襟用カラー（セルロイド芯入）

特長（衛生 經濟 便利）

三拍子揃ひ

特價拾錢
送料貳錢

衛生　夏は汗を吸取り冬は肌ざはり爽やかにして皮膚をいためず常に襟元の美が保たれます。

經濟　本品は低廉にして永久型の崩れぬ製法にて從來のカラーと異なり洗濯屋へ出す費用と手數を省き御家庭で簡單に洗濯が出來ます。

便利　時代の要求により生れたクオンカラーは洗濯簡易ですから二三本あれば一年中間に合ひ。

クオンカラー
製造發賣元
東京市四谷區內藤町一番地
山田商會
電話四谷五〇一五番
振替東京六二二番

◎洗濯の仕方、一時間位水又はぬるま湯に入れたカラーを板の上に置き、石鹼を付け、ブラシにてこすりシボラズ水ゆすぎして其まゝ乾して下さい　乾き次第直に御使用が出來ます。

警視廳各學校御用、三越、三省堂
一流洋品店にて發賣

教報

本部團報

開館一周年記念 昨年の紀元佳節に御周知の如く本部開館の盛儀を擧行してから早やくも一箇年を經過した。此の間吾等は毎週木曜日の法華經講座と、毎日曜日勤行と法話が主なるものであつた、又臨時特別大講演會も隨時開催し、其他横濱、福島及び甲府等へも出張したり、或は盛夏、陰冬の各三十日間 毎早朝の勤行會とか、街頭布教等を以て聊か目的達成に精進させて頂いたことを歡ぶ、即ちこれ皆團員、諸友諸氏の御援助の賜である。

由來教化の淨業は決して華々しいものではなく、又それは花火線香式の一時的のものであつてはならぬ。吾等は世間の毀譽褒貶に煩さるゝことなく、大海の如き度量を以て一路其の本願に順遊すべきであらう、榮枯盛衰は教家の念頭を超越して居る筈である。

近來「日本精神」なる叫が都鄙を通じて高調せられて結構と思ふが、而かもそれが俄量な排他的な一種盲目的な、武士道等に局限せられたかの如き弊が往々にして見聞せられ、我が精神文化の歴史をも無視した驚くべき危險思想なるに鑑み、茲にこの開館一周年記念日に當り、又目前に迫つて居る 教主釋尊の御涅槃會及び宗祖大聖人の御生誕會をも併せて最修させて頂くべく、十一日午後一時三十分より本團講師小林一郎先生の御多忙中をば特に約一時間「建國の理想」と題して我等の最も聚賞に把握して居られねばならぬ大切の事柄を綾述された。終つて法要に移り文學士小西日亮居都を大導師として、髙木顯正師、木村日常氏等講士となり滿堂百餘人は至心に法味を捧げた。一同の緊張せる時に 大日本史料編纂官文學博士菅尾順敬先生は「日蓮聖人の日本精神運動」なる題下に遙徹せる歴史眼から、眞の日本精神は日蓮聖人の立正安國運動こそ國民の鑽仰すべき活訓であることを敷衍せられて、日本精神とは萬世一系の天皇陛下の御統治の下に國民として心身を捧げて國家の完全なる發達に努力する心なることを力説された。當日來會の各位へ小冊子を贈呈し五時散會した。

法華經講座 昨春二月十六日 日蓮聖人の御生誕聖日を記念として開講一年、小林先生の最も心血を濺いでこの經王法華の妙理を普く淸信の士女に與へんと精進され、從つて幾多の事實話例を引證さるゝが故に短時日には終末を告げぬこと當然である。釋尊は靈山に於て八ヶ年御説きになりしこの妙法蓮華經なれば、日蓮聖人は五十年に亘つて示教された。今本講座は目下第五番目の藥草喩品拜講中である、求道の老若男女は奮つて聽講累德をお薦めする。

毎日曜日集會 午後二時より修法 続つて左記の法話あつて四時三十分に閉會の順序である。

一月二十八日

日蓮聖人の三大教訓　礒部滿事氏
天晴地明の春　山口智光師

二月四日

人生觀に就て　礒部滿事氏
法華の信條　小西日亮師

同十八日

吾等の要求と日蓮主義觀　髙木顯正師
三大秘法論　河合陟明氏

寒修行會 寒三十日、毎朝の勤行會に皆勤精進された方は、田伸富重氏と松岡フユ女史で、山田博士夫人及び關原忠三氏等も參加された。

横濱教誌

第七回寒行會 恒例に依る當地の寒行會は本年も赤磯部先生を中心として、一月の六日から二月の四日迄、毎夜會員の各家庭を巡廻して催されたのである。其間、東京小松川の小西日喜師御來講を乞ふこと、三回に及んだ巡廻家庭は十八軒、一家庭で一夜又は二夜、お席を分擔したことになる、時間は正七時から九時迄。例年とは變へて本年は勤行に法華經二十八品をあげた。そして毎夜、その日にあげた品々の内容に就いて、磯部先生から趣旨深い解説をしていたゞいたのである。磯部先生が、東京小石川の會館から、寒い遠路を毎夜當地に迄御運び下さつたに就いては、私達一同感激の外ないのである。

福島教信

一月十六日 夜 大町の中村氏方に集り、岩淵氏年頭に當りていろはよりと「いろは」歌の御話、岩井氏「國際情勢と日蓮主義」について有益な御話があつた。

同二十六日 夜 大町中村氏方に集り、河合先生東京より御來講、大聖人佐渡御法難の碩阿佛房夫婦の供養より論を進められ、人格實在の本佛釋尊を縦横に説かれ、或は共產黨リンチ事件の痛烈な批判や、國家と日蓮主義に及び愛國の至誠迸る大熱辯は非常な感動を與へた。

同二十七日 午後一時より福島高商日蓮聖人鐵御會例會、河合先生の壽量品の講義次で卒業生送別會に移り、卒業生諸兄の前途を祝福して五時名殘惜くも散會した。（以上）

當地の幹部金澤利江夫人御賢息 勝二郎氏昨夏より療養中遂に二月三日御長逝遊ばさる、行年二十七歳。淘に哀悼に堪へず、皮みて弔意を表す。

南無妙法蓮華經

寄附金維持及團費誌料領收

（自一月二十一日至二月二十日）

一金貳百圓也　東京　笠間信語殿
一金壹圓也　同　小峰豊子殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　佐藤愛子殿
一金四圓八拾錢也　大阪　吉永日洋殿
一金貳圓五拾錢也　福島　菅野廉太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　長岡義貫殿
一金貳拾壹錢也　同　吉田かつゑ殿
一金壹圓也　奈良縣　出口馬太郎殿
一金貳圓五拾錢也　福島　佐々木伊太郎殿
一金五圓也　東京　山口智光殿
一金貳圓貳拾錢也　同　木内俊治殿
一金五拾錢也　同　日下部二葉殿
一金貳圓五拾錢也　滋賀縣　外池ワエ殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　田中米吉殿
一金貳圓貳拾錢也　濱松　彦坂寅吉殿
一金五圓也　大阪　德永熊彌殿
一金五拾錢也　東京　本多禮三殿
一金壹圓也　同　小峰豊子殿
一金壹圓貳拾錢也　同　松田妙昭殿
一金壹圓也　大阪　岩見實太郎殿
一金貳圓五拾錢也　甲府　穴山新之助殿

一金貳圓五拾錢也　甲府　穴山　登殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　松淡　たま殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　青山　信市殿
一金五　圓也　同　山田　英二殿
一金壹圓貳拾錢也　千葉縣　菱木　博殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　若林　省三殿
一金貳圓貳拾錢也　同　三浦　勝子殿
一金貳圓貳拾錢也　岩手縣　小岩　昌夫殿
一金五　圓也　西宮　加藤　準一殿
一金貳　圓也　東京　沼部彌太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　高橋　義雄殿
一金貳圓五拾錢也　同　榎本　正殿
一金貳圓五拾錢也　同　榎本まさ子殿
一金四拾貳錢也　同　鈴木　ふみ殿
一金貳圓貳拾錢也　同　近藤　静子殿
一金貳圓貳拾錢也　高岡　林　長吉殿
一金參　圓也　福井縣　岩本　初造殿
一金貳拾五圓也　東京　横山　正三殿
一金拾　圓也　同　柴田　武治殿
一金貳圓貳拾錢也　同　伊藤　夏子殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　高橋　博殿
一金貳圓貳拾錢也　同　畠山友次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　御厨　正幸殿
一金貳圓貳拾錢也　三重縣　伊東　寛殿
一金壹圓貳拾錢也　濱松　三谷邦治郎殿
一金壹　圓也　東京　雪野　すゑ殿
一金壹　圓也　同　大吉　きぬ殿
一金壹圓貳拾錢也　同　柳下　日實殿
一金貳圓五拾錢也　同　墨須源太郎殿
一金五　圓也　同　白井　勢市殿
一金五　圓也　同　小西　日喜殿
一金貳圓貳拾錢也　同　萬城　登殿
一金貳圓貳拾錢也　名古屋　山田健治郎殿
一金五　拾　錢也　東京　伊藤　和歌殿
一金貳圓五拾錢也　静岡縣　川手　海祥殿
一金貳圓五拾錢也　兵庫縣　笹倉鹿太郎殿
一金貳圓五拾錢也　後志　福士　忠治殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　村山　智全殿
一金壹圓貳拾錢也　名古屋　水野　しま殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　石川　鶴隆殿
一金貳　拾　圓也　同　井上道太郎殿
一金貳　圓也　同　宇野　博順殿
一金貳圓五拾錢也　淡路　吉岡正太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　桐生　大澤　いし殿
一金貳　拾　圓也　横濱　和田　岩吉殿
一金貳圓貳拾錢也　高岡　畠山友次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　御厨　正幸殿
一金貳圓六拾錢也　大阪　清原浅治郎殿
一金拾　圓也　福島　中村　美津殿
一金貳圓五拾錢也　東京　尾形多喜男殿
一金壹圓貳拾錢也　同　水元　重行殿
一金壹圓五拾錢也　千葉縣　中村正治郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　墨須　無外殿

右難有入帳仕候也

財團法人　統一團會計

念　告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以御清授相傳ぎ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み愛に本團は一大飛躍を計畫仕り多大なる犧牲の下に先づ本誌の增大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相逼り申候に付本誌卷頭略則御諒承の上爲法國爲一切衆生可相成團員として何卒御賛助あらんことを偏に奉懇願候

猶現在團費誌料前金御拂込の方は其儘團員たるべき特權有之候へ共前金切の方は規定通りに取扱可申此段爲念申添候

財團法人　統一團

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖　語　錄改版　特價送料共　金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領　仝　金貳圓拾錢
一法華經要義　賜天覽　仝　金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓　仝　金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要　仝　金貳圓九拾錢
一佛教の本質と其價値　仝　金貳拾五錢
一法華經要品　仝　金五拾錢

礒部滿事謹輯
一本多日生上人　特價送料共　金壹圓七拾錢
一勤行作法　仝　金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人　統一團出版部
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌　定價一冊　金拾錢
送料　一ヶ年前金　金五厘
送料共　金壹圓貳拾錢

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

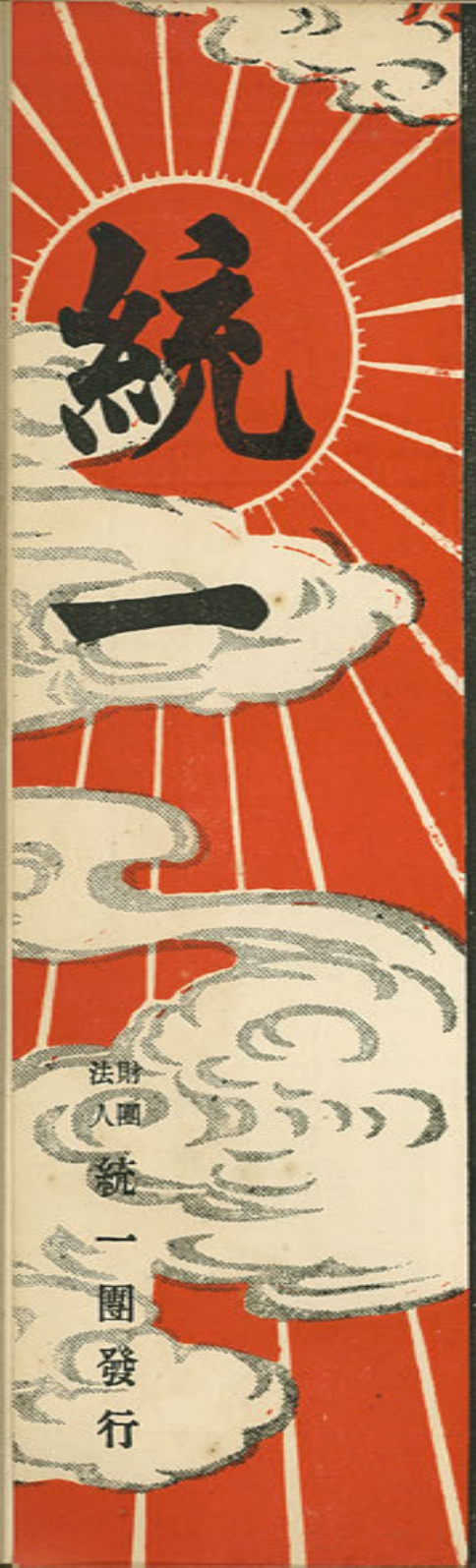
注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可申候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和九年二月廿四日印刷納本
昭和九年三月一日發行
（第四百六十八號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　礒部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　郁印刷所
電話高輪六〇二五番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



目次

聖訓摘要……日生上人
日蓮教學講座（第七回）……河合陟明
立正安國は臺所より（其一）……河口愛子
法華經講話（第四講）……小林一郎
記事
○教報　○寄附團費誌料領收

第三十九年四月號